# 八代集抄

中新雑第六

三十九

特別
イ4
3163
104(39)

雑哥 賀意述懐
まめくかゝるゆゑし
六十賀をとふらひ
万寿二年御堂殿
六十宴にむすめ上
東門院祝ひし給
かぞへしる人その女六
女院乃ゆかりの人和
せめひく祝ひを
とゝなりせねばと
よろこひの心なるを
上東門院入内の時
筝ひく坊六ツや
藤壺のきさき十二歳
にて入内とかやの時

---

# 千載和歌集巻第十六

## 雑哥上

上東門院より六十（むそぢ）賀をこなひ侍りけ
る時よみ侍る（よめるイ）法成寺入道太政大臣（おほいまうちぎみ）（道長公）
かぞへしる人なかりせはおくやまの
谷乃松とや年をつまゝし
上東門院入内乃時（長保元年十一月一日）御屏風に松ある
家に箏ひきならひしてゐる人ある所を
よみ侍りける　大納言斉信（久）
ふえ竹乃よふかきこゑそきこゆなる

貴
14
3163
104(39)

乃屏風の哥大府
花山院のくらゐにまゝせ
まかりしゆ
実行乃松風深き
峯乃松風吹やふに
らんハ箏に琴のねを
すゝむ時も侍るやらん
一条院乃御時
皇后宮定子ハ中関白乃
御娘定子枕双紙に
辰乃日かつき十二人
十二月廿四日宮の臣
五節乃舞姫の傳（カシツキ）
枕双紙云小忌の衣も
の女房十人出させ

それ乃松かせかきならしけん
一条院乃御時皇后宮五節出させ給ひ
ける時辰乃日の夜かしつき十二人わらハ
下仕へまて青すりをなんきせら
れけるに小忌（右京の大夫のつきの局）衣の赤ひも
乃とけたりけるをとりむすふや
とりかねたるに中将實方朝臣より
てつくろふとて足引乃山
の井の水ハこほれるをいかなるひものと
くるなるらんといふを聞てとりあへすよ

給ふ今二人ハ女院淑
けいさ乃人やかて
はらからとち辰の
日乃青摺乃唐衣
かさみをきせ給ふ下畧

よみ侍りける　皇后宮清少納言
うへはこほりあはにむすへるひもなれハ
かさす日かけにゆるふはかりを

あしひき乃山ゐの此哥も枕草子よりかは拾遺に入歟こゝろハ
紐とけたるなるへし　山井と山藍にそへて〽青摺ハ山あゐにてする
青摺ハ摺木をする也をミ衣とし　ひもハ赤紐を前両にさけて
うすおほへれ　彼実方の哥に山井ハこほるにひものとくるそ
いふことをめつらしく清少ハむすひつるそのきさおかれハ日かけ
にゆるふとみゆるなりと理りたる也　花も細りなとうへ日花の
かつら日乃影を
そへつハ山ゐ乃枕
草子にハうとおもと
あり

十二月そのかと門をさき兼て
あんゆわかしと櫻しかゝる男

年ふりて門はあきさ
ゆるさし男乃もとを
より鶯のへ言きさ
多か里乃春のたより
なる年門はさゝきも
我方へ心さしはかえ
さて門をもとひけるを
なれとみ乃沈みをと
えんし故なりけむし
とのことかるせ
誰か里をさするにわ
に我宿をもとふらん
と嘗するてよめる
いとゞねてかきゆく
女と別まてより名
新かりける心なるも

年ふりて門はあきさぬらんやとひ（イ いひつかはしける）て侍れは流かしける

上東門院出羽弁

多か里乃春のたよりに鶯の
かすみにとつるやとをとふらん

藤原実方朝臣乃とのゐ（宿直 殿上の宿所也）所にまかりて
さもうくかへるあかつきかへりてつかは
しける　藤原道信朝臣

いとゞしくおきゆくかたのさえまさりも
中くらのわかれゆくしもかな

二条院　拾芥云二条南
東洞院東　道長公
造之二条関白伝領
春乃よの夢ばかりなる
書言云夢はかなき
夢のはかなきたとへに
かれ枕なるも春乃
夜の短き夢ばかりの
その手枕に曲な
き名をたゝさんを
かひなくとかひなく
たゝんをかひなを立
入てみすの下よりさして
かるのこと其案中古
乃言のよの所を

二月ばかり月乃あかき夜二条院
にて人〻あまたゐあかして物語
などし侍るに周防内侍よりふ
して枕をがなとしのびやかにいふを
きゝて大納言（長家子 俊忠父）忠家これを枕にとて
かひなをみすの下よりさし入れて
侍れはよみ侍る

周防内侍

春乃よの夢ばかりなる手枕に
かひなくたゝん名こそをしけれ

いふなるは枕紙
と名付ととて
きこゆる段落の名よ
むかしのかりめにか
へしことハ見えたりす
その注釈とみえたり
ちきりありて春のよ
かやうにかはしけるて
とも名母の契りなるそ
これハいかにひさしく
夢をかなふハ甲斐
つきくとし源氏物の
歌よ源氏の哀
と知も入月乃かけ
けるね契とそ

といひ出し侍れハ返しによめる

大納言忠家

ちきりありて春乃よ深き手枕を
いかゝかひなき夢になすへき

一条院御時皇后宮に清少納言はし
めて侍ける比三月ばかりに二三日ま
かり出侍けるにかの宮よりつかはされ
て侍ける

皇后宮（定子中関白女）

いかにしてすきにしかたをすくしけん
くらしわつらふきのふけふ哉

いみしくなるにしかと
羽出る嬉しく侍る比
と侍るに宮を付へし
こおとまりこおハ
みて書れんかき
初くハ二三月のへそ
さへ書侍るハ此の宮
枕草紙ハ筆跡を
雪のうへもくらしかね
清少のさいしく書か
ときハ宇かりとけさひ
侍る后宮の清徒説を
出て宣居侍りしく
こう集侍られの
はひえんといひます

返し

清少納言

雲乃うへもくらしかねける春乃日を
ところからともなかめつる哉

いつしくおほされける人乃むすめ
乃宰相流わねをゆかりて
世にしらく人にまされけるを
ゆるさくきこえけれハよみてつかはし
ける

選子内親王（村上皇女 大斎院）

はひえんといひけるをゆかりて
はしきかたまもはさめはるかな

遊さんと言ひける
このえさてもく
帰りけれハつかさ人
とさかへしものへと言
遣はしてのこと
御禊乃出し車に
賀茂乃祭のおり
毎年午日斎院みそき
きしより来日斎院
上下の神社に参て
祭をとりおこなハん
このとき出車ハ七條
それも女房乗用之段
王の料乃牛ハ関白
進之出車乃料え

---

選子内親王に侍ける右近のもと
乃斎院よりまかりて御禊乃出
車にのるを送て又乃日遣ハ
しける
斎院中将（イ大斎院中将）

みそきせし賀茂乃河波立かへり
はやくみし瀬に袖ハぬれきや

（卯月中酉日賀茂の使中将勤之こと）
まつり乃使ひにて神館乃
宿所より斎院乃女房に遣り
ける
藤原実方朝臣

ちはやふるいつきの宮の旅寝には

---

山城近江遊之と江
次第ありけり
みそきせしかの河波
すくらし歌之ハ選子
内親王の流ありける
をとひきて返歌せんよし
まさやするとよまの
賀茂乃祭の神館
に宿せし定武甫
歌もの葵を香すよ
引むねひも思ゆや
かゝるふよするよわハ
花橘の香よハ葵よ
人乃袖乃香をと覚る
橘されハ此香に為る

---

阿ふひそ草乃枕なりける

弾正ノ尹為尊乃みこかくれ侍て後（冷泉院皇子三条院同母弟）
大宰ノ帥敦道乃みこ花たちはなを（為尊乃弟）
つかはしていかゝ見るといひて（むかしを思ひ出やとの心也）
侍けれハよめる
和泉式部（弾正のみこの妾）

かをるかによそふるよりハほとゝきす
きかはやおなし声やしたると

上西門院かも乃いつきと申ける（鳥羽院皇女）
をかりせさひくゝ唐清よまれく

のことゝよろこばれまかり
八殿原の千とせ良房な
き八日しるしさまま
れきそ絶て数ゝ
乃宿り人と伺し
ますかれ千とせに何
女院にておはせしを
八実家にて後撰よ
ありしかふれ八唐崎乃
波のまゐりしと宛
女院切りかね時八必
唐崎にて禊すら
双林寺の千と
そゝしや新續古集

志かひたる法ともなくて女房のもと
に流れける　八条太政大臣
きみのすまくもしはしのよせけ殿
志家乃うしろ寺もかれたる
か家乃いつきかわまつくは（式子内親王のおはすし）
切ときせんとへ侍る文の日双林
寺乃千とせともきのふは
すりなど侍るまてすは流れ八
され侍る　式子内親王
そゝしや新續えつるこゝろく

女院をば称まうし
のまゐらるべし
右兵衛督ゝの侍りける時
公卿補任云伊通公保安三
年正月廿三日参議同年
十二月廿二日右兵衛督大治
年二月廿一日中宮権大夫
古今著聞集云伊通公の参
議の時大治五年十月晦
乃除目に参議四人[illegible]
長実宗輔師時皆中納
言に任じぬ伊通位次の

志家乃渡殿より神事ぬまゝし
右兵衛督にて侍りける時中院右大臣
中納言にて侍りけるに弓を切りて遣て（たび）（なぞ）
侍りけるをはらさ辞申てこもりぬ
侍りける時かのゆみを返しつかはすとて
よみて侍りける　大宮前太政大臣伊通公
やよせよてしはしわれもあつさ弓
かへるをみるよりねまれたる

上臈なりとてもれしかば伊通公ふかく恨みに堪えずして宰相并兵衛督中宮大夫三つの
流れさせを辞して檳榔毛乃車を大宮おもてよりて門出て破却（やりやぶ）ましけれと
禊水（みそぎ）手（かん）りするまへに神前の君かことくなり

これ今ハ流人となりしあはれにて著しなる由を又年比かくされたる蒔絵の

ろを中院右府雅定乃もとへおくりやりて八とせをおくりてまかりし

八とせもおくりけるよし　彼条識右兵衛の子に侍りしかひし保安二年より

大治五年まて八年をへて　条識右兵衛督兼ハ箙（ゆき）を持たれハ一級も登第

哥乃心ハ恥と悔ハ今の絶

あはれなれと思ひする

又昇進乃時節も

何くもさる物かともなく

さめのまゝにならるへし

古今著聞集に見えたるの語

子云かうくれハ此兵衛の

うくく経て長承二

年九月にぞ兵衛督も

中納言になられけるか

其すゝりの摺衣を

返し　　中院右大臣雅定公

あはれなれ猶ひすつあつさゆみ

又ひきかへすときもありなん

右大将兼長春日（二月初申日）乃祭に上卿にて立侍り

けるともに藤原範綱の子清綱か六位

に侍りけるに其すゝりの摺衣をきせ

て侍りけるをおなしく見しられハ又の日

---

葉草乃春日の里よ

て信実朝臣の摺衣を

きかひしをあつさかや

まかひし其のなさう

伊勢物語に春日の

なかさ家のすり衣若紫

乃とられ陸奥これす

みちのくのしのふを

ちすり狩衣よりを

の頃て其故實の

出立を蔵るゝ

露しけきを岸せりの

我の里亭を遠ゝ

をとしよら年第乃

ことを出のなり

のかはるまてとゝまりけるとかせ給へる（[illegible]）

左京大夫顕輔

まのあたりしのふもちすり狩るらん

こゝろ乃みたれかきりしられね

上東門院に侍りけるを里よ出てかけ

彼時女房乃せうそこ乃かたはして

（ニワウコト）に筆法（紫式部ヲタテマツリシニヤ）へよあらてんとてひとゝ侍

それハまゐりける　紫式部

露しけきよもきかなかの虫のねを

おほろけにてや人のたつねん

此くかやの画と
たゝの執心ふかくや
あまりの人の歌の特との思
昇殿　殿上をゆるさるゝ
事しいまたゆるされぬに
こハ述懐とそ
人しれぬおほうち山乃
大内山　仁和寺の上乃こと
禁中をあらはしてよめり
昇殿なくて述懐の歌
歌をきこしめして本意（ユカシ）
てとよめるなし　此
り昇殿ゆるされ三位まて
なれり
三条女御　琮子　内大臣公教

二条院乃御時年比からからゆるさるゝこと
なくてあきの月のころ侍りけ
昇殿ハゆるされ侍りけれハ殿上
くる夜月乃ひかりをみて女房乃
もとへ侍りける　従三位頼政（大内守護）

人しれぬおほうち山乃やまもりハ
こかくれてのみ月をみるかな

三条女御（琮子）遁世ののちあきころに
月出てなかめし侍るよしいひ
て侍りける　権中納言實綱（内大臣公教子　祖父實行嗣）

實綱ハ妹後白河院女御
あふさきゝ　述懐二なとにいふ
秋をへてひかりをそふと思ひし
彼家の紙乃月とよミて
女御なりし此事をもい
へ感歎れとこそいひ
しれともひのかけの遁世
なりしのたまへし
とふ人りもひよらて
ハ頃するへし
此ふ千やふかき千秋
万葉ニハ波乃みさお千
神の御さしひくかれ
こる殿上人もいひしも
此毎をよかりけれ

秋をへてひかりをそふと思ひしに
おもしれぬ月乃かけもある哉

月寫家（イタリ）といへる心を
仁和寺後入道法親王（覚性）

とふ人もおもひよらてや見る月の
くもるはかりこころうきすれ

月乃辞あかさよ（よるの）世侍りける時
よみ侍りける　法性寺入道前太政大臣

ゆくの千や圓かなるやうさひて
かるきさとやこころの月ひとりすむ

寛回歌の月ハ後のよ之
毎は子非ハ矢冠覚もひあ
地里大文孫現色こ正当
武蔵の国羽林宰相子在
何中れそら見ゆく
一勝万そのふ布る色
ひとりねて月を
そこ乃物思ひをも
清つらく物する時
るありき心なるも
物思はぬ人もやと頼
我ねられぬまゝに月
をとるま付て世ま
物思はぬ人も詠ん
とおもひやるる
し

何よのえら空ゆく月ハ一つまく
やとしねミ乃ハいくそしあらん
題しらす　中務卿具平親王（村上皇子）
ひとりかく月を詠る秋乃夜ハ
なにことをかハおもひのこさん
赤染衛門
物おもはぬ人もやこよひなかむらん
ねられぬまゝに月を見るかな
清う子
詠めつゝむかしも月ハ見しものを

---

詠めつゝむかしも月ハ
詠めしハさる事なれと
今ハすゝ伴ふて月を見
るも涙も物うく詠め侍を
と更ふかく袖のひまなく
まれなるもへきものハ
足数のをちこち人も
ひとりの子哀なる
心ならへし
かくはかりうき世の中の
うき事何る世を経
きてよ詠る見まに
なほく面白き
月乃さすのま麗も
ありけるを清るや

かくやハ袖乃ひまなかるへき
和泉式部
ひとりのみあはれなるかと我ならね
人にこよひの月を見せはや
おもひやる待る清月のひかくお
く待るまよ子待る
久我内大臣
かくはかりうき世の中乃おもひ出に
見るともすめる夜半の月か
山家月といへる心をよみ侍

すみ侘て身をかく
伊勢物語住侘ぬ今
限と山里に身を隠
すべき宿求めてん此
歌を本歌として月
ハあまりくまなきを愛られ
ては身を隠さん山里
も何やかや雑説に是
あきれ月にとかり
そりまかすさ彼の
月読月夜見日本
紀に皆月のことゝ
十月よやも又喜れ
通用されし頌と
さよなかにみけね

くる

皇太后宮大夫俊成
すみ侘て身をかくさんと山里に
あまりくまなきさ夜中乃月かな

百首乃歌奉りける時月の歌
とてよめる　前参議親隆
そりまかさす九月よそ見さく

志浦のさきさまに雪かかりけるを

月歌十首よみ侍りける時
藤原家基
さよなかもみけねの浦に意つれて

吹飯浦和泉　鏡磯
清須と云けりかえ
西行せさり
いつはりと清見潟
清瀧川山城わハ
筥にさける椙乱
と月乃おちれて
あさのころすゞむる
月乃光にすめるを
見る時ハさすてゆく
ことをのかやる
まくやそかすはれ
あるべし
さびしさに新も
心後より

志賀浦磯の月かすかきぬ

俊恵法師
いつはりと清瀧川にすむ月を
さそひ行なねおちかるを

賀茂成保（シゲヤス）
あさ乃ころすゞむるきハの気そ
まやくも月乃あへゆくる

観照法師
さびしさに新もいとはまかれ
ひとり月ハ見るべかりける

いかなれはかけゆく
月にむかひてもみ
乃ふかの句こゝ心
深し 無為の
行すそもろく悲う
くるしきの翻を身
ろう
ところもにみる人はみな
むかし注たる月
みゆ友は或は先立
或はまよひうせし（二千里外）
故人心 朗詠 南楼翫（註）
月之人 八月十五夜 秋期 而身ハ
何去 （注） このみるのかゝや

藤原清輔朝臣
いかなれはかけゆきても月はみん
そのよのあきそおもちかくら
年比彼行よまのわかきくるゝ
かなかまうてまたく月お遠隠
とふ心へと待る　登蓮法師（注）
ところもにみる人はみなかはらん
月はむかしのかけそかはらむ
都をはまれにこそまくやまかる
待ける時月をみんとよして侍

---

何くにてみしも此世は紫
月乃艶光てゝ又
世界は生れ出ますん
ことしもゆかせく
見そことの清光
乃兵きさ望ても
そのくしも毎乃
万葉山乃端はさよ
月を出るを待て
それは秋の空なる
光を本寿まて伊勢
物語大てや月なや
てそ比此れは人
乃そとする秋の
心なるへし

なる
法印静賢
何まくにみしこの世はめくるとも
おもかはりするやまのはの月
月乃寿おしく待侍る時宵の
月比心を侍る（注）　源仲正
ものあくも我世のかけをたのみすて
いさよふ月をまちわたるかな
見テ月ヲ慕フ二故人ヲ一といへる心をよめる
源仲綱
晴きゆく人はやさまもかはらまん

はきすらし人ハやみ我身ハ狂よハ幸をのゝへうねハ後世菩提乃光悟とさき空を念ずるやのかゝくわの世ハ照月りつよとすれてふを身と観しこゝろや拾遺する了　拾遺に明の月乃光をよつろもそ我世のいくえのゝるハうき雲乃かゝるそこ病ぬりと申にある

いかなしく維も月をまちみん

百首哥よみける時月乃うたとて
よめる　　待賢門院堀川
のかるくわの世ハみねにすみても
かくりく月りすむこゝろかな

權大納言宗通女准三后
従一位藤原宗子
やまひのかく成
て久しくまかり侍りて心うき
よしと寒せさせたく侍りける
流らしける　　近衛院御製
うき雲乃かゝるそらにも病める身を

ろまは世のうきさまをかゝハかくすのやまの陰をあへし哀に隠れ給ふみねの山る　其面拝は辨才天　南所權現　本地千手　龍樹　（拾遺抄）木乃まをるゝ明の月心ハ明かるへしと云く空なる神も月それハ只独乃恩こ又見月の空かしこと乃ねを雲に洞よ白雲乃世をおしみるや空すと乃月の雲のをくられぬ之新撰朗詠云書扇月落秋調白雪

かくれなきてそらのあけ乃月
みのお山に日比こもりて出侍りける
おりしも月乃おもしろく侍りけれ
ハよめる
仁和寺後入道法親王覺性
木乃まもる有明乃月をみるすハ
ひとりや山乃嶺を出まし
月乃哥とてよみ侍りける
道性法親王
こと乃ねを雲よ志てきこゆ也
月さゆる夜乃みねの松かせ

之聲ヲ三管絃鳴ヲ暁清シ
ほのぼのと明衡の作し
何となくいはん名残をと
いふ心
いかにせんさてもうき
浮世のうさも月見は
なぐさめんと詠す
月を見てはなぐさむに
あるへき心さもあると
思ひ月も同じ哀れは
昔て身を慰む
方もなし いかにせんと
也 我心慰めかねつ
さらしなや
山ふかき松乃嵐を

何となくいはん名残をいとしさへとや
あけちかくすめる月かな

権中納言長方

殷富門院大輔百首乃哥読侍りける時月乃哥とてよめる

いかにせんさてうき世はあくさすのみす
よ乃千月もあそするおちかたわ

藤原定家

題しらす

山ふかき松乃嵐を身にしめて

藤原家隆

深山苦松風朧月
乃ねさめにもひ
ふきおひしきさきよ
むへし
まれにもいつもいそき
出来もなきさるやなお
き籠山にてる月をこそ
乃本意とすへし
世をいとふ心ハ月を
山居を好む心をかく
よめる心は
さびしさも月みる
心ばえ慰さかねハ身
ね月[illegible]のちを
とひ来る人もかなと

たれか寝覚に月をみるらん

八条院六条（鳥羽院皇女暲子 八条院 右中納言師仲女 暲子内親王女房）

まれにもいつと出てあるさやかに
なをすてやまれおもふ明けの月

法下實條（中納言伊實子）山

世をいとふこゝろを月をさそふとや
山のおくりのみおもひ入らん

藤原隆親

さびしさも月みるほどは慰みぬ
いまならんのちをとふ人もかな

霜さゆる庭の木乃葉、
霜さゆる夜の庭のこの
はも皆ちりしきたる
を其の閑なる月を
独みて見るやうなるさ
なき月見るや
ととふ人もかなと也
此明月ハミるやとの心
すみわたる霜を見て
此二乃句をよく見るを
きかてむつゆへ月見と
よそひにとかるや
心ハ明也

寒夜月といふ心をよミ侍りける
円位法師
霜さゆる庭乃木乃葉をふみ分て
月ハみるやととふ人もかな

世をのかれてのち山寺にすみ侍りこ
（みちもつらく成ける）
ころよみて人のもとへつかはしける
平實重　金葉集
すみわたる霜をいてゝみつへゆく
月をしたひて山のこなたに
（といへる心をよめる）
松の月と讀る
瑩恵法師

ふる里乃板井ハ
神楽哥　我門乃板井
乃清水里遠ミ人ハ
汲まねハみくさおひけり
是を本哥として古乃
板井に月さへすます
と讀て人住ぬ心を含也
清水ハ新しく出るも
ある水と小月ハ常る
みすてし新しきも
すみなきと讀て
むさきうハ紙も
ハ新しと出来ぬ
れさしもゆかしき
さまる常るなと

ふる里乃板井の清水みくさゐて
月さへすまずなりにけるかな

池上月といへる心を
藤原家基（伯耆守家光之子　詞花集）
池水ハ新しくむすぶ世すめれと
おなしあきさへありける月かな

賀茂社乃歌合に月の歌
とてよめる
藤原親盛（文章生讀歌　大和守）
ほとなくあかつきも袖乃かはらぬを
月乃かつらに露やおくらん

閑しさる也
ほとゝく濡る袖乃
心明なる也
志宋ふか霧の
霧乃まよひて暁
乃月をわかすの
ころ山家のさひしさそ
しるくきこゆる也
あしひきの山の端
山のはちかけれはそ
月の出はやけれ
まちていはんすまし月
をまつ心切なる也
もろともに秋をや
月は秋の萩花り

山家暁霧といへる心をよめる
大江公景（散位公成子　隼人正　五位）
志宋ふか霧乃かくれはあさこめて
ありあけゝさ此月を見るかな

山家月を読る　静蓮法師（源頼綱子　俗名宗兼）
あしひきの山乃端ちかくすむとても
まちてやそ見るつりの乃月

月照ス二寒草ヲ一といへる心をよめる
紀康宗（山城権守定宗子　雅楽允）
もろともに秋をやしらぬ霜枯乃

---

映しる事をいふ也
てらの霜かれと萩を
萩ハ秋月のさかりと
思ひて霜光を照む
らんと思ひやる也
出家せる山中のよ
我庵ある山水乃
の宿せる水月乃
宿りし影ハ家の中
る親しくてきさ我庵
さしるやうなれハか
くよめり　さへ乃字
我草の庵の心也
かつきさ夜此霧咲
心明く霧咲むすふ六

萩乃上葉をそてらす月影

月照ス山氷ヲといへる心を
法眼長真（権中納言顕季子）
まつかゝる山したみつにやとる影ハ
月さへ苔乃いはやをそすさまし

山乃端残月といへる心をよめる
藤原為忠
かつきさ夜此霧咲むすふ木末しに
えさくの残るやまのは乃月

茅屋月といへる心を

桐壺にも宮城野乃
露吹むすぶ風の音に
と云る歌にも
やま風のさそふ乃若葉
雨下乃若葉とも詠れし
下にも枕上ニ月のさし
入しを也
山かけにかくれみゆる
空晴るや深山乃嶺
居乃有れは人を
何かて待ける出るを
月のけ乃入ぬるほと
まよひける宮の辞
とも有し

覚延法師か孫公童子
山城国製

やま風のまや乃岩にさそはれわ
まくらにやとるよるは此月なり

題しらす
法師慈寛

山かけにかくれみゆるすまのゆく
すまき乃まかふわたる月をなかむらん
月のけ乃宿ねるのちふりはつる（あとイ）
まよひやみ乃ゆくへをも乃らう
称政太臣乃家に百首此哥
よませ侍ける時月乃歌の中に

此世にて六十年そ
心ハ月と其世にて
もてあそひける此
よそんとの名ある七
六十年むかし
こん世ハ心乃中に
心月輪乃ころなる
へし此世にて一生
此月のあかす
あかしと其世そ
ハ此の月を照さんと
信臣 聖人七十五代
崇徳院より近衛院
後白河院二条院まて

よめる
俊恵法師

此世にて六十はなれぬ秋乃月（みイ）
志てのやまちもおもかはりすな

月乃歌とてよめる
寂然法師

こん世ハ心乃中にあらはさん
あかてやみぬる月乃ひかりを

二条院乃御時四代まて侍臣
まるすをおもひくよみ侍り
ける
皇太后宮大夫俊成

四代仕へて猶上
達せさりし也
いつれは志つみなる
心は増し代々の四代
をへてと見えたる今
けふまて只代々と示
四代の心なれは也
かゝる志川み人も

蒙求云漢武故事曰
上至郎署ニ見一老郎ヲ
鬢眉皓白ナリ問何時為郎ト
對曰臣姓ハ顔名ハ駟文帝ノ
時為郎ト文帝ハ好文ヲ而
臣ハ好武ヲ景帝ハ好美ヲ而臣ハ貌醜シ

いかなれは志川みなから年をへて
代々乃雲ゐ乃月を見るらん

堀川院乃御時百首乃哥奉りける
時述懐乃心をよめる

藤原基俊

かゝる志川み人もわりなく
みよなくいのちねあけきさへもせし

僧都光覚（基俊子興福寺僧）維摩會乃講師乃請
をたひ〱もれけれは法性寺入道
前太政大臣（忠通公）に恨申けるを志めぢか

尚少陛下ハ好少而臣ハ
已老是以三葉不遇也
上感其言擢為會
稽都尉ト　蒙求ニアリ
朗詠正通申文曰齢
亞顔駟過三代而猶
沈メリこれ此ちなみし
維摩會　公事根源云是ハ十月十日より十六日まて七ヶ日乃間
興福寺にて維摩経を講せらる　十六日大織冠乃忌日なる故也
大織冠病悩おもらせ給ひて今ハと見えさせ給ひける時百済乃尼法明大
臣に申さく我大唐にて維摩経と云へる経乃中に問疾品を讀誦
志奉りて病平愈せしめんと申　則此一品を誦する大臣の病たちとこ（ろ）に平愈せり
大臣歡喜合掌ありて生々世々帰依せんと誓ひ給ひて下巻次第なる経を書
ちかひ給ひし　是より　請此會ハ興福寺にて毎年十月十日より十

原と侍れと又そ乃年もも
れにけれハ遣りける（よみてイ）

ちきりをきしさせもか露を命にて
あはれことし乃秋もいぬめり

顔駟ハ會稽都尉になれり基俊ハ猶不遇の歎き

六日めくところなる講師ハ藤氏乃長者の宣（セン）をうけたまハりてこれを法性寺殿へ講師乃請を申しけるなりとぞ法性寺に出るちからの事は元より叶ハざりければ翁の方より藤原の子も孝行の中にて何んかとて是に何れハ翁の心の杖をとりてさせもが露を命にてと申しこなたの下句ハ上の句にまかせて老の身の心乃程をしるべき事もさうし給ふにや只なれ乃こゝろなる風体也さりとて文字のさきなかる也標の原下野道乃運を祈る男乃不覚ハ天運それハ誰ともなし何すとせしかの事なりと世乃中ハ何をなしけれどもまた世上乃ありさまも男はさまにてわかりかねてまかせてしかりきを浮世のすまいにて軍事の

運をもつる百首乃舞とて待ちたる中によめる　源俊頼朝臣

世乃中ハ何かよからぬもあふすなわちハあはれさへこそいろかはりけれ

述懐の心を詠る　覚審法師　基俊孫

すまきまふしよきわ乃まれ浮世の世ハ

---

覚審四千字よや宗明ちゃくし もくすやうきみなり（言ワ冬）ふち六一瓢一箪のよづきうきみなりもさ返すかわりの此世のおもをさくれ無ひ兼おそくのまさりとてゆくすゑをおもへ心連しけのふかれかゝるの橋とて吉ふかくるに すゝ橋も名ハ我来代のちかしよ我をゆの名をおさんやもとくもてよ男の

うきよわかれおもひてすみなき　経因法師（大和守助）

もりなしやうきみなかりき世ねきこのよをさくも老のひかねん

天王寺にまうでて待ちたるたのもしとや笑ひこてあん橋のおもしろきて詠侍る　源俊頼朝臣

ゆくすゑをおもへハ連し法のふかれあさき乃橋を名ハのこりけるあれしの糸のわかれか

行もつる斗なる介れ
ハ先れの末世しとて
あふことしいかでかゆく
只明く良暮と逢て
ゑあされハ哥乃の徳
古ハさる禍ゐをせ
わされと詠もすと
しわれなも八様の
縁なるへし
はせる囲碁男中のかて
囲碁ハ仙家乃非を
出く行为徒下恵康
ヶ子之は於遊作之
又基 囲碁ヶ子なそ
三中基ヶ見此集作者

道命法師

あふこともかたわゆめる世の中に
むりしあのゝ乃たちしつらぬる
おもて西そて　道因法師
久方れもあの乃禍ハ詠もはし
世うし御手もとききわれなも

はせる囲碁男中のわてはは仙家に
もしすまもと成な久る（かかろろうまく）とま基ヶ
多分か乃ろさ哥下里て侍れ
なに人乃御作もかたわて及て侍れハ

ひとゝせ行すられとも
岡田のやし人念
ハむしふもおもすす
かそかられなし

志しのまのひや
御殿くよの勝
乃さとあれにとり
勝ときれさらくハ
白雲りまつくしと

松乃とをせけりつかくなけけ
侍りる　はせる家基 囲碁六男
ひところはしすられとて仙家乃
松乃ときをかへしきかわり

吉野乃勝をよめる

中納言経忠

志しのまのひやせおしよの山
おちろるしまさ乃さとあの（せさのイ）かせも
さゝ乃大児ちりおりわて
これ連哥よ侍るまよよし侍

滝乃をとハさミく
此哥拾遺集にハ
滝乃糸ハと入集
哥泥

ぬけハちるぬかねハ乱る
滝乃白玉ハつらぬき
てもぬのくもちか
千ますと見え
布引滝 波の意
京極前太政大臣 師実公
六条右大臣 顕房公より
土御門右大臣息

侍りける
前大納言公任
滝乃をとハたえて久しく成ぬれと
名こそなかれてなほきこえけれ

屏風に滝おちたる所をよ
める 藤原長能
ぬけハちるぬかねハ乱る足引乃
山よりおつるしき乃去て玉

京極前太政大臣布引乃滝見ニ侍
りける時よミ侍りける
六条右大臣

---

多乃ミねて白雲
如く白雲と見ゆる
ことくにハ誰さらし
けんとの心滝を瀑（ハク）
布といふて
阿したつにのりて
鶴ハ仙人乃のり物也
宿ハ仙室の心なり
菅家文草五ニ 遊龍
門寺と云詩ニ云く
人ハ如ク鳥ノ路ハ穿ウカツテ雲ヲ出ツ
地ハ是竜門ハ趁メテ水ヲ登ル
橋老テ往還スカ誰ソ鶴駕
閣寒ヘテ生滅ス幾リソ風灯ニ

多乃ミねのミて白雲と見ゆるハ
誰さらしけんぬのひき乃滝

竜門（たうもん）寺にまうてゝ仙室に書
付侍る 能因法師
阿したつにのりてかよへる宿なれと
あとたに人ハ見えぬなりけり

おなし竜門乃心をよめる
藤原清輔朝臣
やま人乃むかしの跡をきてみれハ
むなしきとこをはらふ谷かせ

やま人乃むかしれ跡
朗詠ニ山中ニ有仙室
といふ題の詩菅三品
石床（セキシヤウ）留洞（トヽマリテホラニ）嵐空（ムナシク）
拂（ハラフ）これ也あるへし
をとにのみきゝしハ
布引瀧乃名高き
よしなれハ程瀧の
高きこといふ世滝体は
あさ二十丈と云り
けにこそ本体なるし
こしとよ川宮の
室八嶋下野也煙と云
よりも火とよそへて云ひ
としふる本体なる
藤原顕方さると

布引瀧をよめる　藤原良清
をとにのみきゝしハことのかすならて
名よりもたかきぬのひきのたき

むろのやしまをよめる
よしとゝ川むろ乃八嶋の煙とも
いかにたきさせぬおもひあるらん

堀川院乃御時百首哥奉り
ける時恋の哥とてよみ侍
りける　大納言師頼

---

かつらきやわたしも
久米岩橋ハかつらき
乃神を役行者（エンノ）が
縛せし故事果
ざりしされと奇古
るるふゑく芸る
どもて読る也
いかにかたらふ
次事ハ歌手さゝめ
てうたれハいかに
あれこれ哥と
むちかしてもな
伊良虞（イラコ）嶋志摩也
心ハ明なるへし

かつらきやわたしもはてぬ物ゆへに
くめ乃岩はしこけおひにけり

おなし御時上乃おのことも題をさく
りて哥たてまつりけるに小舟を
よみて読侍る　権中納言俊忠
いかなるもかゝらぬあわれいせの海乃
しほ引かゝる浦のみはなれぬ

百首乃哥れ中に松をよめる
修理大夫顕季
玉もかるいらこかさき乃岩根松

志かてハ野しまの
野嶋崎近江浜名東
小出以前ハ淡路所也
万葉十五ニ夜半乃野
嶋の浦とよめり夜半
の野をよみ玉ふ小倉合
契ふ夜半の浦ゝ哉
乃心明らか也
廣田社　摂津也
日本紀云天照太神
誨神功皇后曰我之
荒魂不可近皇居
當居御心廣田国即
以山背根子之女葉
山媛令祭之

いく世まて見し年乃つもりけん
夜半をとよめる　源俊頼朝臣
志らくもハ野嶋の浦のさゆかちに
波こそよせ乃山のね月ろうき
廣田社乃哥合として人々によませ侍り
ける時海上眺望といへる心をよみ侍り
ける　　権大納言實家
名ミもハ郡乃空を此山のはを
見てやあるおの帆かり出れ
権中納言實宗

乃ちハ郡乃名の
北の山乃ミゆる限り
見わたして北ハ
乃ちハ北の晴尾ハ
摂津にてあるよし
そのうへに須磨の
須磨乃浦の晴見え
只明に皆海上眺望
乃同じ心をよめる也
そろくとおきへの
御前沖津武庫
郡の浦も同じ
ありそやる志ら波ち
心明に眺望すなり
ちとせも皆見渡すなり

ちりまかふこすゑれをわけた見渡せハ
波ハ雲井乃よそのちりぬる
右衛門督教實
そろくとおきへ乃沖とをわけるせハ
雲井ありまよふ北山かね
眺望乃心をよめる
登蓮法師
ありそやる志ら波乃にハ見渡せハ
かとちりのにねきさ乃浜の舟
藤原重經

あるかよに年経済の
波のくるゝハ波の
よせくるを齢に
こめてしぬ忘をこ
とかく鶴をよめ
りなし経済
お注
ゆくすゑハ波こえ末
和歌の浦とは名所にて
の年ハ波とともに
ゆくすゑ年よれ
ともおもかけせぬと
わかのうら之部老乃
名なるへし

なるかとみの寿のほきをこめつれは
あまのくともみてねとしのる
わかのうらとよみ侍ける
祝部成仲
ゆくすゑハ波こえてもやゆかしん
おもかけもせぬわかのうらなる

---

五十御賀すきて
鳥羽院康和五年正月
十六日御誕生仁平二年
五十にならせ給ふ
鳥羽院　崇徳三年に
白河院立させ給ふ一男
おり給
心にハしはしふかひをそへよ
のちの春をハとしもとれ
未年乃今ハ雅もあり
まちぬるすれハ御あそへ
花もこゝの句ひをそへ
よろし五十ぢにもなる
させ給へハうちよみ給

# 千載和歌集巻第十七

## 雑哥中

五十御賀すきて又の年の春鳥羽
殿乃桜のさかりに御おのこともに花を
翫ふよしよませ給ける
鳥羽院御製
心にはしはしふかひをそへよさくら花
のちの春をはたれかまつへき
落花乃心をよみ侍ける
仁和寺後入道法親王覚性

あるとしハ仁平二年也
中二年ありて保元元
年七月二日鳥羽院崩
ましますを恨みも深し
浮世ハいとゞ心のまゝ
ならねバ花も見るかひ
くちをしく花のちる
と恨み深かりきとぞ
禅定院　執行の坊
の名なるべし
やどりし霜花ハむかし
やどりし人ハ亡くして
むかしの執行の坊なる
心ハ明し
急務る　益信僧正の

---

そのかみとうし千もまてしさくつね
うき世をいれもこころあさねて

僧都頼實身まかりてのち又の年の
春禅定院乃花さかりなるをみて
よみ侍りける

僧正覚範（京極大臣息）

やどりし霜花もむかしの色にして
ぬしなきやどぞさびしかりけり

からおくほど東山乃霞みち
見き侍りけるに参議某花拙お
くれけるを見てよみ侍りける

ちかきわか集に哀れ
いかへりかゝくさかなも
花ハむかしのかはらね
と我ハかはりし身なる
ゆゑとおもひやるらんや
すれやすんこの心也
雲乃うへのまへある宗
遁世せず朝廷につかへ
まかりけるに禁中の
花の春すぐしのまゝに花
出家のゝちの
忘られたりけるに花ハ
我を捨ぬきものなし
とひきつるもを我を
と忘れぬるのとくとく

---

前中納言基長（法性寺道信公）

いかへりからくさりなき山さくら
花も我をもいかで見るらん

遁世乃のち花のころよめる

皇太后宮大夫俊成

雲乃うへのはるこそさらに忘られね
花はかずにもおもひいでじを

ふるさとにありてひくまてあひけるさと
まて乃みび葉れ清水のもとに
に御車とゞめくはさひそかや

このあたりやと
栄花物語に云 京を出
させ給ひて粟田口関
山のわたり志賀の山こえ
相坂のせきこゆる
清水寺とまりまて
ゆきくてひかり逢し
ゆきてひゆき逢坂の
心細く同物語に御堂（石山）
まかりせのおとよろ
義き此ち云れて
御のやに御物語
おもひもあらで滅罪（メツザイ）
生善（ニヤウゼン）のさめにまく
獲广（ゴク）なる為せまさと

こゝろありて御らんなさく
まほとおもひける

圓融院后 一条院国母
東三条院 兼家公女

ゆきまりてひゆきあふさかの関なり
いまそかきりのかけちかるのさき
やまりのありまてなをしとるひ
あと志侍りける時よみ侍る

前大納言公任
今はとていりなんのちそおもはゆる
やまちをめのみどこ入とほし

ぞ長保二年九月之明
年十二月四日皇后宮崩
今はとて入らんの為
公任は道世の心さし
侍りて長谷に籠
出家の事栄花物語に見えたり
其後まて入らん
ほとかくれんとさと
うき世をは嵯峨の奥の雲隠や
山里はさひしかれ
うき世よりはすみよき
かのうき世をはなる
みやこそ
花さかぬ谷のそて
谷乃底とかよめり

春の比おほみやのかくてよめる
うき世をは八峯にすてやすむらん
都やまのこそすまはかはりけり
あけくれ侍るはよめる

和泉式部
花さかぬ谷乃そこにすまゐしてよ
山かくも物をおもふなるかな

前大納言公任長谷（ながたに）にこもり侍ると聞て
まかりゐける時
つかはしける
法性寺入道前大政大臣（後拾遺 雑 法成寺の宮）

うくとこそよめり
谷乃戸をとぢやはて
此哥拾遺集なる春
乃えぬるともえて侍
堂殿の君と云侍ハ長
久二年より薨忠通云ハ
永長二年より生る六十七
年ほとまて法成寺を
云つきにと云寺の張なりし
此哥拾遺集春往
かくてふ花なれる
きみかまてとふれ心
御くあらる異山に
とらへハ物なるやし

谷乃戸をとちやはてつる鶯乃
まつにおとせてはるもくれぬる

山寺にこもりて侍りける比宮殿
てさふらひける人乃まうてきて
と寺なとよみけるにかへりて
よめる　　道命法師

かくてふあとを散る物く山に
きみこねよくるをおもひいつらん

除目乃比つかさなりさめて殿わ
ける時範永かもとにつかはしける

---

除目の比つかさたまはらて
式部丞子云大江公資
ハ大外記を兼るの
者也僉議乃何れも
推任とすきのりて
あるり小野宮右大臣云桐
問り云事よ爾如せんれ王
とく推任せしと桐模を
年ことに涸のほよ
流ひ身をくさすか
身も捨てまつさと身
とも捨んとも思
よりかく読るにや
おもふまらてや

大江公資
年ことになみたの川にうくとも
身をなけつまぬそのふちなかりける

（右大臣云）桐模を懐抱して秀才を業とする
諸卿顧を解これよりもくむる
竈とすることこの比のすかや
毎年乃除目よりそりなかひるき歎ク

寄霞述懐乃心をよめる
源仲正

おもひわりまちてやまなまし身を

彼西住乃うき世
をいとひし庵やつさ
はれんとよみて心
とゞめし但それハ山居
のあはれをよみし哥ハ
世のうき事をよめり
心ハ思ひわるなるべし
ちるを見て帰る心や
桜花乃心なきなれば
て遁世の志しをも
つゝ見ゆるなるべし
花をうらむ心のいはれし
極楽しとふ西に花
は散花の思ひいれをみ
ありなやさし此哥法

うき世てゝるかすみまかりせさし

世をのかれてのち白河乃花を
見てよめる　寂然法師
ちるを見てかへる心やさくら花（イさん）
むかしにかはるしるしなるらし

花乃哥あまたよみ侍りける時
花にそむ心乃いかでのこりけん
すてはてきとおもふ我身に
佛にハさくら乃花をたてまつれ
わかのちの世を人とふらはゝ

---

とすゞ川乃哥合後成
に判者ならせてよ
ろしとの事なり
佛にハ桜乃花を　朗詠ニ
菩家為是花時供世
尊ニ隠民隠法を伝よ
をなすれなへきの綱や
このまゝさひらへるを
俗なりしわれハ世の花
色ふかくもひしやせすり
ひらへせしと出家を悦
べかりし心経云色即是空
世の中をはかなき物と
思ひとりて無常を観す
まことにこそあれさうすハ

世をそむきて又乃年のはる花を
見てよめる　寂然法師
このはるぞおもひもかへすさくら花（やまさくらイ）
むなしきいろにそめし心を

題しらず
世乃中をはかなき物とおもひすハ
いつしか花乃ちるをりしへいし
（寿永四年平相国のすゝめにて福原遷都）
都うつりとゝ咲しらぬころの哥比
春白河乃花さかりに女のまねきて
花のみゆる…待

惜しさかぎりなき花
のさかりにのみ見て
かくいかなる世の事を
彼地うつりを深くま
けし心を花に寄せ
て物を思ひけるにや
あるべし
法成寺　後一条院御時
道長公建立ましまし物語
にありて近衛より京極東に
ありけるを後に荒れて
後々には道長公より五
代の末流なれば塵の
中にも家といふもあれど
みなりてさびしき花

よの人志つまりて
かくばかりうき世のすゑにいかにして
春はさくらの猶にほふらん
花さかりに法成寺にまかりて（ちりかゝりける）
金堂の中への花のちりけるをとて
よみ侍りける　皇太后宮大夫俊成
かはらぬるむかしをしのぶさくら花
ちるもの末もあはれとぞ見る
依花結契といふ心をよめる
源定宗朝臣（右京権大夫忠子　少納言）

と極めきひし先祖の法
堂の花をも見れば新し
く咲くも残しおきて我へと
とどめは花を我ぞ喜び
みるらむとても
山さくら花をとゞめるよし
かゝる山荘の景色にたえ人
とも待ちまいらすれ
花に依りてその心
うつりゆく風にも世を
数ならぬの花も
乃風の根源の根にし
はかなき吉野
の奥にかゝる山根
さかりてさうて

山さくら花をあるじとなりにけりすみし
人をまつとて花のいはひし
寂蓮法師のすゝめ侍りける百首の哥
の中に花の哥とてよめる
藤原定家
うつりゆく風にも世をばしらせまし
よしのもしば花そちりける
花の哥とてよめる
源季広（左大将久季弟子　下野守以清孫）
かくおもふことうかなつらん世はも

この時なとも恨むるに
それこそみしかけれ
あるひハつもりて此恨
を恨むへきと感し
みな人ハすくかならて
世に源家を守る事叶
あらハ我おもひの末
ハ花とみよ思はれハ末
世にくも花さくる身も
やらんと也
さり世にさかり桜を
とあれ世ハあすも我
かくれと桜をまく
てもえんの思ひ桜
そうて花を待とし

花見る身とやあらんとすらん

家に桜をうつしてよみ侍る

源師教朝臣（大納言師頼子 従三大弐）

さくら世に盛り桜をうつしても
我こそこゝろ花をまちける

（仁安元年十月十日立春宮六歳）
高倉院東宮乃御时權亮（ノスケ）（坊官也）にて侍
けるを述懐にかく侍る
こゝろ賀茂社の歌合とて人く
よみ侍ける述懐の歌とてよみ
侍る

權中納言實守（右大臣公能子）

くらゐやまの花を待とハ
春宮乃權亮にて
年ふるといひしと
我望みて昇進を
まちわひさはされ
あはれの思ふへし
述懐ハ四位也
春日山松によみを
藤乃末葉ハ藤原
氏乃すゑ乃数ならて
ぬれともさすかに春日
乃神恵を頼む
心も松に頼の縁
物おりハ心や身みき

くらゐやま花をまちこそ久しけれ
はるのみやこに年ハへぬれと

崇徳院乃御时百首哥めし
ける时述懐乃心をよみ侍り
ける

右兵衛督公行

春日山松にたのみをかくるかな
藤乃すゑ葉乃数ならねとも

歎く事侍りける比よみ侍る

前左衛門督公光

物おりよ心や身みとはなれさらて

述懐乃心乃歌也世
の人にきくへきを
ゝるへし
数ならて年へぬる
世乃うきことは別れ
ハとおもふことハ
ほしくねかふ也
いつとても身乃
身乃うきことハむかし
今よりかはらねとむかし
わかゝりしハ老を歎く
なかりに今ハ年積
なとくやむ也

うき世をはいとひなからもあるへきに（いとんイ）
述懐乃歌とてよめる　俊恵法師
数ならて年へぬる身はいまさらに
世をうしとたにおもはさりけり
道因法師
いつとても身のうきことはかはらねと
むかしはおいをなけきやはせし
述懐乃歌読侍りける時昔白河
院に流されまかりける事をおもひ

---

いにしへもうきには
古とし流浪の身
なりけれ白河院の
御時めしかへされ
唐に御ハ河乃孫
なり
あはれてふ人もなき
誰あはれむ人を
あはきうき身をも
世をいとふ家
またいつくへとひえ
つきとく我身を
かくいふ所也心や

出てよめる　菅原家基（法名兼覚）
いにしへもうきにはしつみし身なれとも
数ひしきはしたゝ川乃みの
広田社乃歌合によめる
藤原盛方朝臣（中納言顕時子　民部大輔四位）
あはれてふ人もなき身をうしとても
わすれてはいつくいとひを門へゆき（すみイ）
右大将實房中将に侍りける時十首
歌よませ侍りけるに述懐歌
とてよめる　中原師尚（明経博士師元子　大外記）

教へしね身をとうき中原氏ハ明経(ミヤウギヤウ)乃儒士として十三経を家(カ)業(ギヨウ)とし外記乃局務(キヨクム)を先途(センド)とせり帥尚ハ又帥光明経博士にてこの身を大外記ニ任し位ニ叙とさすがに家風ハ相續し先途ハ遂(トゲ)けしことを我子も智と自負(ジフ)して教へねとの述懐や

教へしね身をとうきやの晴にしも
伝へそくり家乃風をしわけても

学文料(レウ)中伝ふるをまもりつす
伝ふる時人乃さまへひろるかな
こゝふにみそく流りつける

---

学文料ト侍るもしハ蛍燭料(ヨウシヨクレウ)として学窓乃灯をかゝけて昼夜をとゞしてす大学寮にて飛百古せられし大江氏ハ中納言維時にて文章博士を兼任しくより重光匡衡をさそしよ代々大儒乃

なほいやまきことにおまかれる灯火の
かけりなきこころかろさを

大江匡範（式部少輔維光子 左京権大夫）

家縁て江家こゝろ匡範もちから学文料をたまはりたるもおもひいれられた儒業千餘代へし心を灯乃光にて十程りおほれることよめるなりかけりなきとハ家まして学業も拙續り難き歌をなほいやれとなり

難きとも
世をわたるさをおもひおもひて人をもよ
かゝるてすゝや乃影れなきを

菅原在重朝臣

---

世をわたるさを学ふ新ハ古て學子學業の生る氣色をこそ世のうきをさひ學ふ人もとくと之

ひく人もなくて捨つるはつさ弓
こゝろ流よりもひきあつかりけりも

菅原是忠

---

ひく人もなくて捨さりしをもまゝくまつるかひよろかく我を引助る人もうころにあそて読

いかて我ひまゆく駒をひきとめて

二条院内侍参河（一 和泉守為業女）

めくるあり
いつそわれ隙ゆく駒と
万葉五云四蛇争侵而
過隙之駒夕走 八雲云
隙ゆく駒ハ物れ隙
を馬乃はしるより早
きよしなり此哥ハ
いたつらに年月
をわたりておしきよはひゆる人
をかこちとゝるを
馬名を知とよそへし
いまつくしけるぬ理は
此世ハいまきうこく
乃身に風しよの心
をいそるをや

むかしかつるなをとられん
摂政右大臣乃時家乃歌合に述懐
乃歌とて読る　源師光
ほかハていけしねかりなるとて
うまれぬほ乃世かりもかゝるを
流さめに伊勢か成けるを辞し
ゆゐる時大僧正行尊のもとに
はべりける　源俊重（俊頼子長和二年正月任伊勢守）
いふせん伊勢乃濱荻みつれて
おもひねいそのあをかりかく

いふせん伊勢乃濱荻
八雲云水際近きにしく
ミてとりし基俊説ニ
伊勢を辞てもとおも
もとすまるみに侍
ていふせんとは
まきさ乃戸を深山風
今乃ものふれける
つきに深山あらし此の
とふかけらもさひし
き心流行きさ成し
を山田乃庵にて出
ぬけ夕けるもまつく
かるかきるに嬉きを
よろ己雲もかるを

田上山荘
しらかひ乃山里ニ住侍ける比風
吹しけるを聞てよめる
源俊頼朝臣
まきさ乃戸を山かせはまへてかれく
とふかりけ流れもぬるゝ神乃郷
山田乃庵に嬉乃立るとて
よめる
鶴盛長
を山田乃いほりにしてわかりなかに
しらふかりもや雲とゝまるらん
崇徳院乃御時百首乃哥　なにかしの時

みなく内のし物かれ
ハるかに立煙りや
宿ともしらんとし
山さと乃柴折くへは
煙の絶くなるそ
人乃すくなきをしる
その心山家ハ外の
やうに繁華ならぬ
所のさまをよめるなる
へし

秋をつるかれの虫乃
枯野の虫ハ男へ比して
我をうき虫乃声絶
いかゝハ安否をきゝ
訪ふへしとの心なる

山家乃心をよめる
二条太政大臣のめのと肥後
山さと乃柴折くふる煙りこそ
人すめりとそしるへなりける
あの月乃晴るゝに出てそ
よそけなく見えれハ見て
とハぬ人そ法そしりける
藤基俊
秋をつるかれのゝ虫乃声たえて
あれやまやと人乃とへかし

---

尋ぬるへし
藤原道信 恒徳公四男
左中将 正暦五年卒廿三歳
この世にハ住へきほとや
心明し一段住ハ沈へきか
つくまと月と森まてく
いのち何ハいかさまに
かくうき世にハ命を
堪まし覧れとなきさ
もろくて何ハいかさま
うらいせんかる憂世を
去りぬ虫たに秋ハなく
物なくし
秋かゝて空に男なく

世乃ことにまかりて月乃あかく侍
りけるに光乃くまなき物思ひて侍け
るハ読侍る　藤原道信朝臣
この世にハ住へきほとやつきぬらん
よのつねならす物乃かなしき
題しらす　和泉式部
いのち何ハいかさまにせん世をしらぬ
むしたに秋ハなきにこそなけ
紫式部
秋かけて空に男をハかのねと

心は明らかなる住する人
あらば我が心より身を住
せずして楽しみあり
心を身とするのちにも
文選陶淵明云既自以
心為形役註呂延済曰思
求於禄故形屈而駆役
あれども誰ぞ我を
我もかく成るかの詮
なきも思ひ出んと
下る心明らか
吉の板間の風に
心は明らか玄旨百人一首
乃抄にも宗祇には参
考がりべく思

身りきてふ心ろあらなか
常よりも世間をちちくやしなる
此さのみなとふかれける

藤原兼房朝臣

あれども誰ぞ我をおもひ出ん
行る世からたとふ人もなし

前大納言公任長谷に住侍りける比

風をけしかるよみおもしき
流れける　中納言定頼
吉さとのりけるみ風にねさめて

---

案ずるに物語七夜の
珠のまこと山寺に住侍りて
長谷すこし出家し給ひ
のち宗教に左大弁なる
身しこのまことに少弁
三方の句を定めてと
谷風の身にしみ寒き
本の本は子のことを
そうするまや寒む物語
二上る山里の谷の嵐の
定さまるとを下る月
いみは帯ひけりや
かく法服そしてかりて
きぬらんとは寺の事は
ひかりなるかな

しものをしをおもひこゆやまと
ゐし

前大納言公任（治安四年十二月十日出家）

谷風乃身にしむごとりみるさとの
これをきこそ帯ひやまと流れ

前大納言公任入道長谷に侍るとき（万寿三年正月四日於長谷出家戒師三井別当僧都）

侍りける時僧の法服をおくりける
（イよみ侍りとて）さてきりける

法成寺入道前太政大臣（道長公法名行観改行覚）

いみへてしおもひけきやとかりうし
かくきんとのむかしのこともなを
ゐし

入道大納言公任

時（トキ）いたり機（キ）熟（ジユク）して発心（ホツシン）
志すゝめる録章よの
ゆゑにや道長公ハ公任
子七年にまさりて寛仁
三年三月廿一日出家なり
おもしろちまりあれハ
道長公も公任にも康保
三年に生れて同年
なりし友にて何事も
生ハ先に入道せるによ
我もおくれじとて出家
給ひしなり但萬寿（？）
後に出家をされしと
契りてきこえを見ゆ
ありけるを見れける

おもしろちまりし時ハ君か代まさる
のまなこころもをちぎられぬや
古（イニシヘ）年乃人をおもひ給ひける
（寛仁五年五月九日崩）三條院かくれさせ給ひて（三条院三条坊門）後積院の前
をとりけるに松乃梢おもしろふて
流わき（築垣 築地之）にかゝれる門のあれるに
志ぬ乃あるをかんでこゝ内乃小侍従（カウジジウ）が
絵ふるふ給る安乃かの
むかし見し松乃こすゑハあれにける
蔭乃かたをさしてかへる所

むかしゝ松乃こすゑハ
松ハさかりも葉かりけるを
蔭乃人さしてかへるなり
なりとぞ
一品聡子内親王ハ後三条
院皇女准后輔仁親
王とのいもうと
山さとのかけひの水乃こほれ
るはおときくよりもさひしき
ものなれと
おもひやるきさハれさ
ひしとて
やまさとのさひしき
おもひけく覚の事
せんいきひしなれるも

一品聡子内親王仁和寺に住給ひける頃
乃時かけひの水を（輔仁のみこ）のみこのもとへおく
られ給ひけれハよみける
輔仁乃みこ　（後三条院第三皇子）
山さとのかけひ乃水乃こほれるは
おときくよりもさひしかりけり
返し
聡子内親王
やまかはのこほりしき霜乃すみかにも
かけひ乃あれこそるをきかまし
大納言實家乃ことに三十六人集を

紀貫乃かこけれハ
きゝをもわけよむ
あるへし
三十六人集 人丸貫之
を哥仙家集也
故大炊御門右大臣
公能公 徳大寺左大臣
實能公子 實家公等
太皇太后宮なとの父
このことハきゝあつめ
おもとにうつりて父君の
手跡を見てしのひ玉ふ
筆をうつし集る也
本乃ことよりくるゝもの
落葉をとりて 新古本

かりて西八條へうつりける後に故大
炊御門の右大臣のかきおきて侍るさう
しにうきをしたゝめて侍る

太皇太后宮（作者部類云 公能公女）

こ乃ゝにうきつゝある身乃えを
われ秋乃かけミとゝめる
西し

權大納言實家

まの乃にうつる世乃あとゝひ
よのつねかけ乃あるをゝむかしき

高野にまうてゝ侍る時山路にて

なきあとを歎く心なり
て父君の手跡を見て
懐旧乃心をのへたり
何となく世をのかるゝ
うき世を捨てゝの
出家をしたれハ苔
苔衣をきしと云 苔乃
衣ハ僧門乃服也 又ハ吉
野の山伏なとも有盛り
おもひての行くハ心乃
身ハ捨ても歎く身の身
あくハ世をいとひたる
いとひやすき世と云ハかり
やすしとく
やとりする岩屋乃

よみ侍りける　仁和寺法親王守覚

何となく世をのかるゝやまとなれや
岩まくらこけ乃ころもゝきたりけり

述懐乃心をよみ侍りける

おもひてのゆくハ心乃とまりなん
いとひやすきそうき世なりけれ（身イ）

大峯をとをり侍りける時笙乃岩
屋といふ所にてよみ侍りける（イ常）

前大僧正覚忠（忠通公子 聖護院）

やとりする岩屋乃床乃苔筵

山中乃寂莫志をかき
ねくれもやられね也
いふわ乃とこ此若道山
中のさびしきさまなり也
身乃かくれをたふすと
うき身なりにてとひ
やつて年へぬれいく身の
うきさも志りすらや今
そみんとせ世を旅りき
わすれとゆかぬてうき
身とそれも旅りかきそや
うむりやまよのれハ
菩提乃名をあてとう
世なとも皆くへるれとよ
志すともうきせ世を

いくあかりありぬねやしれね

述懐乃哥とてよみ侍りける

大納言宗家（内大臣宗能子）

身乃かくれとしてすむ人やなかん
かくうきなりしとをへぬれは

右近中将忠良（六条摂政子）

うむりきやまよのなハ志らすも
うき世をいとふ志るしなりけり

二条太皇太后宮別当

杣川りおろす筏乃うきまなりけり

---

いふ志るし計よ世世
旅人とて背きさえられ
まやとも兼ぬ後乃葉三
字さ深の名を志らすと
も旅をそられて身南
みすて出るは身の定や
杣川りおろす筏乃
序ふうきまなりける
ゆく物とらくんそ
なり哭ぬく
そのうちれは行る葉
自ぬるを今すれはこ
ろ旅をも情むへき身
とハあらね物をこの定
うしとてもいとひ

すきゆくよのそこまる身なかりけり

百首哥乃中に述懐哥とてよめる

藤原定家

そのかみしのそミハある世なからへて
かむと入りこゑてねへきかな

摂政家丹後

うしとてもいとひもはてぬ世の中を
中々なにゝおもひ志りけん

題志らす

法印偏園（大僧正行尊弟子）

のかるへきかたをそまよふくらの山

哥の心ハ明らかなるべし
作者摂政家丹後ハ
宜秋門丹後と同人
也散位源頼行のむ
すめなり

のかくさるゝ宮中に
倫寛ハ俗名にてと卿し
人されハもる文徳も行へ
中にハよと法官のゝ昇
進をよろこひてるうこゝも
よかしく乃ハ法官より上
乃よろこひをつけかくるへく
き述懐なるへし
まゝ人乃花さくまゝと
人乃加階し怨みを

これやかくの志ろくなけきまて

十月に重服にちかく侍りける文乃（其侍者といふ事有　加階後をよろこひて）
年乃あき侍官ともかはし侍りける
を吟てよめる

**中納言長方**（中納言顕長子）

もろひと乃花さくまをよそにみて
なをしくるゝそ志ゐ柴乃袖

述志して

**藤原顕言**（賢子　左京大夫顕輔子　本名顕時）

うき世にもうれしき世にも先たちて
なみたそおくるゝなりけり

嘆き雲に侍りける時おもふ事ある

---

花さくまゝとよめり
十月の重服乃間を
折時雨るハとよみても
此時長方ハ四位なるも
五位雅方の袖と讀り
うき世にも嬉しき世も
猶撰嬉しきもうきも
心ハ一門にてわれぬ猶ハ
洞の日乃ハ大形同
歎き雲に侍りける時諒闇とし

よのもとこそあまりてのかるとく
ゆくしくる時そのちにまれり
くもゐさゆく都乃人乃ともに
流りける

**おなし別當惟方**（中納言顕頼子　参議）

此頃ハりも志川むとさけハなみそさ河
あのまつしよかもぬれる袖なる

古今著聞集云別當惟方ハ二条院乃御乳母子にて世にならふ者なく時めきけるか
くかるをひろまほによりて後白河院の御いきとほりふかゝりけれハ出家して
配所へおもむきけるかのちに許されて人にゆるされたれとも身
ひとりハ都のひかりさすを侍へ吟て此頃も志川むとし
此頃ハも志川むとさけハ　此ころひ乃ゆるされしも都ゟるまて河の

猶よし此歌も流むときけハとよめりされハそゝめあらされしはらく
「または誰ぬらくとも」古今著聞此歌乃注ニ云ときく古人へてまた
りるて法皇仰く此歌やよみたりんさしも粗漏く宮たるよ
此歌をよみてめてたかるやうやくゝ入乃心をやりける和歌
乃徳を皆ふへし

かくそれかうき身なら
思とも
心ぬるへし
心乃われのあるまゝやく
はすおこ注此歌おかし
何の歳歌八歳歌とて同
心ちこそかりけれや
家まの月かて　東山双

世をそむかんと思ひたちけるころ
よめる
寂人法師（作 神祇少副大中臣定長子）
かくそれかうき身なれとも捨てんと
思ひかりそれそかなしかりけれ
心乃おもむくまゝにゆく末ねかひ
まかりたるにとことをあつめて宗り
のかくて後日吉乃社にまいりて

林ちよはやみる嫌
今のとおり
おもひきや志賀の
みこころめうりあまり
とあらんといふなかりと
この歌の心ひきれ
侍りし或説あり
近江をよくてわたらう
かくいかうき世の中を
くゝ憂世をもてそ
いま繁く結ひつき捨
もいる身すいとく行
めするしとの心も
おもひねいくれ

よみ侍りける　平康頼
おもひきや志賀乃うら波立かへり
又みることもあらんものとは
述懐乃哥よみ侍りける時　寂蓮法師
かくいかうき世乃中をそむくとも
まつへきるゝ乃すまゐありけるく
修行にまかりけるとき
よめる　覚禅法師
おもひねいつくれ出てゆく花ハ

行ゆくハゆく〳〵うき世といふ夢のさむる
拂ひさるに殺へしと
いふかなひ無て後の世に
あられ出くる名ハ奈落
ならくこそあれといふ
世の無常を見せて我
發心を進るをも感とせ
あるなる也

行ゆく末ふり露のことろく
世乃ほかなきをとひく語る

権僧正永縁

夢とのみ此世のことの見ゆるかな
さむへき折ハいつとなけれと

夢とのみ此世の事の乃
世のことをさとり見てる
りつわつらひさる
光陰の時節ハ早き
しとの心なる也
此世をハ夢の様う

わつらふ事ありて雲林院なる所
にまかりける人の子かつとき

良暹法師

此世をも夢乃夜にのみ思ひて
なかれとおもふ人の心ゆかし

---

病中なれハ死ぬに近き
身と覚悟の心ありける
みや作の様にて也
に前途ちかく悔を
らん久を待とよめる
夢とハ心に對して言
乃高深く惜ふや
うきことのわすれむ
心明る覚てまるる
くのうき世のさだ
缺乃心もせねとも也
うつゝも身をやるかた
うと在くのすゑき
物とおもひことも
うきこ夢ハなこりまと

題しらず　よみ人しらず

うきことのまどろむ程ハ忘られて
さむれハ夢の心ちこそすれ
（一本此哥讃岐院の哥とあり）

紫式部

いつくとも身をやるかたのしられねハ
うしと見つゝもなからふるかな

述懐百首乃哥の中に夢の哥とてよめる　皇太后宮大夫俊成

うき夢ハなこりまてこそ悲しけれ
この世ののちもなほや歎かん

まゝりとらし夢を
覚ての名残に迷ふなれ
夢のうきはし世のう
きもわれの世に驚く
〔荘子也〕斉物の心
又實子二字象の云
風体なるべし
うたゝねも現といひて
夢中にも又夢みる
るは本来は現を現とさ
ためしきを莫用
の胡蝶に似たる事也
いとひくも夢も無
（同集）此抄憤なるく
とりわけて同体の意

百首哥たてまつる時無常の心を
よめる　藤原季通朝臣

うたゝねも現といひてたのむべき
夢をもゆめと見るはこゝらめ

上西門院兵衛

いとひてもなをおしまるゝ我身かな
ふたゝび来べきこの世ならねは

花園左大臣家小大進（式部大輔在良女）

夢やゆめうつゝのうつゝなるさへを
何めひわくもすきねべきかな

---

夢や夢うつゝの現
心は亦用の夢の
こひのゝるも也
行すゑゝねみもろの
略すゑね身とさて
て朗詠ニ観身岸額離根草といふ語意
を用ひてかくよめるさ
あるひは何時ゝせり
生得の人をめぐり
ますとも何てしも心
をしく化世（アダシヨ）にかはさゐ
なりと思ひのらう
君とハ實の思をさそ
そのかり無命とも

行すゑゝねみむろの岸ほに根はなれ草
あすをもしらぬおひとしめらん

前大僧正覚忠（吉野金峯山にて）
まのあたく神仏とゝ不和まへ金泥（テイ）
法花経書きて埋み侍るとて

五十日たゝかりさてゆかりて待るゝ人
（清海の宮）（十房覚忠）慶覚熊野の方によりまうでゝのへ
覚忠こそはいひをまうける
くもに流れくいひとそなる

大納言成道（通）

行うしねいのちうけていまをまて

まの語をも続くに
りんと思ふなり又り
切なるをと也
うき世をハ捨ても命
世を捨て身乃山居なり
ら先ニ語りつゝけて
王とハ捨ても出にけ
やとの也
光しくもよわやかなる
誰とも人も参はまハ
我心ひとつをすまし
まつもてあのこゝろを
まくとも思ひとりを
するにて老の身
あはれなるをも知ねハと

きそのしやこまかゝりけるもやゝとく
哉
前大僧正覚忠

うき世をハ捨ていひしか山かくれと
きそのふりや出んとすらん

閑居水声といへる心をよみ侍りける
仁和寺法親王守覚

光しくもとまらわれふ声ねく
心ひとつりすまをうきく

高野にまうてゝ侍りける奥院
の静遍法師かゞ庵室にまかりてハ
る

---

いかに誰とも人もなき
閑居の歌の中より
誰も〳〵露の身なら
露の身のきし安き
物としおもひ侍れハ
稀まことも心とゝ
めたる住居世のさ
道理ハ草の庵は
とも知れハ心迷
安楽の谷僧 安楽院
山門乃別所にて般若
といの谷にて訪
ふ西法房を一ツとう
あはれさかゝる毅ハ
あはれさかくハ等閑と云

くるま哀にてくれハかゝつらく流
ありける

誰も〳〵露乃身ならしとおもふにも
こゝろとゞめし草乃いほりかな
権大納言實国

秋乃比山寺のかへて横川乃安楽
乃谷僧のもとにまかりたりける
西法房乃障子にかきつけゝる
藤原公衡朝臣

あはれさもかゝるすみかハかりねを
こゝろさへすみけるめの雑

忝くも宝之忝くも杦
こゆる被かりとも俗袴
表裏の心ハなりハ墨衣
それこそ山居ニ隠棲の意
等閑回ハ三拜詩の題

彩をくもを　法印慈圓（天台座主　六十二代）

おほけなくうき世の民におほふかな
わかたつ杣にすみそめの袖

おほけなくうき世の　言葉おのれが我身を卑下なくいふ詞なり
弘世（コウゼ）ねがふの心ハ法徳を施す事なく天台座主をもて
微く上一人乃寶祚（ホウソ）長久より下万民乃安穏快楽（ケラク）あらんことを二六時中
守るけく護持（ゴチ）とる八身子も無世あらんとある事一切うき世乃民
におほふとハ佛の大師より乃法衣を一切衆生におほふことあるべし
我たつ杣ハ比叡山也彼佛教乃法事よりかのひけるを　何のくすり
三千やくミつきく乃佛よる我立杣に冥加（ミヤウガ）あれとせられし墨染乃袖を指
乃宝りなるハわかう　御座我立杣中く墨染の袖をおほけなくもうき
世の民に知かれとし　王城守護乃山ゆゑく我かたつうかたき袖へ天
下乃民をりおほひく二世安楽を祈り玉ふよと分りよ世の中うる七佛

法者乃須ハ彩色今素
さびしさようき世を
うき世の俗となる
岩屋乃さびしさを之
隠遁すれハ彩松
風の独けて孤逆と
し山里ハおもしろし
きるうこう遁世あら
きよかへ須よりハ
世間よりよめるも
清くとおもへ六蛍し
ねさめの夢の心お
かく夢の世のうきなれ八
えつハそろ蛍しと
まとろまくさても

寂蓮法師

さひしさようき世をかへて思へハ
ひとりきくへき松乃かせなれ

殷富門院大輔（式子大輔在良女）

清くとおもへハかなしいつまての
ねさめも夢を見るまてくなる

西行法師　俗名季政

まとろまくさくともやすきハなせん
ねさめすへいつしねいのちまかれる

六条院宣旨（源頼国女）

縁覚乃りてさとくの
世の中ハ命のあれ命
それハまとろく果
あんなハ此縁覚となるま
しられハ不せんと
ほよろそていねさる
まくて果すに心ハ
かすし富非可思維
はきまりんを見る衆
心明なるへし
はまつて かきるす
撥（カキ）嘔（ナラス）古今の相
そての鏡ハ中をよ
経と心かくしもさハ
きんとめてやくそ出

---

はちす葉をみるハ我こゝろかれ
をそれきつゝきこの世あるかなし

さまかへんとおもひ侍り人乃物哀
あまる夕それよ箏乃ことをひくと
きゝて　二条太皇太后宮式部（金葉作者）

はまとくかきなす琴のきてのむち
こゝろあくしもきかするかな

題しらて　覚仁法師

大井河ところせ乃瀬り身をなけゝ
きやくと人乃いさせてしるか

---

家せん名瀬よ引て
あれハ今ハとてかき
あすとよめる之
太井河とあせの瀬
あくあく関と人
まいせんとそ
とりへ山見る寝ねも
蓬死なましかハかく
露のみのこてきよ
しきふつく平復て
此歌好よ河かハう
まつきてすとの之
わけもいとひ
只明なれしかた侍る
かこハ残さ達もとと

---

病いおもりく東山なる所よ侍り
けるをとふらひて侍りしと人の
とひく侍る返事よよめる

大江公資（散位成子 隼人正五位）

とりへ山き身のつねもくちそて
こけ乃志たにハてく人るかし

題しらて　法眼兼覚

わけきりいとひし庵のうきまゝと
かさねておもへハおもとれあすけきと

賀茂社乃哥合よ述懐の心

世乃中はうき　今
世をうきと云ひ知
られつゝかくはひ
ても世も安くはの世
も厭しくれとも
かくめぐるなるや

世をうらむしき苔の庵
苔の庵りすむところ
てる身の上也七里
隠乃其はいて身の
それは山ちかり荻て
てやくくはゆかしき
の世をいとく詠り

ふくよめる　素蓮法師
世乃中はうきはいまこそうれしけれ
おもひしらずはいとはましやそ（いそ）
山ちかくこもりぬ物る人に庵り
さゝかへる人乃いつか出んとすると
（こひ）いかく待たれは待ちける
覚俊上人
世をうらむしき苔乃いはやにすむ隠乃
こゝろもいかにかゝるものへ
源清雅（通清乃父　歌人　家集アリ）九月はかりかにさうのへく

紅葉は御身つゝわれつゝ
御身世をと　父清雅
が代り御身世をと云
はけするまるべし
おもひやるをあらはぬ
心は嘆く清雅心に
て世に出るの事也
ものうき乃嵐よ云ふ
其も無常を告る
よと思ひ行よ観
るやまやまの事
中く不義を付侍ば
くみてこそ味はうも
いつかの身をなくさ
浮世に出きこゝそ

山ちかり侍るを人乃とひて侍
るを見て世をとや侍くれは
見えきける　源通清（歌人　清雅の子　五位）
おとはやまはかゝりねん山よすみかの
袖かり露をく秋乃はきを
題しらて　寂位法師
何り清き乃嵐に心つゝ薄せ者を
こゝろ乃そこにこそきくらまし
いつかの身をなくさましと思ひ出て
うき世ちりのうき山里のかせ

とよひかくとも我よ
限てはをこらくやと
の心なりや上るは道
世乃中よ道こそなけれ
言首云ることに世のう
きことを思ひ入て山
とこひ入山乃奥にも鹿
乃物悲しけふうち鳴
なゆく山乃奥にも
世のうきはなき也
とく佗く世の中よ
逃れへき道こそあけ
里ともうち歎く也
此集ら撰時なこそあ
なれとけるかう俗雅

述懐百首乃哥読侍りける時鹿の
哥とてよめる　皇太后宮大夫俊成
世乃中よ道こそなけれおもひいる
やまのおくにも志かそなくなる

秋乃比山ちかくしよみ侍りける
藤原良清（てる御苑頭学　太宮大夫なり進）
おもひやるさへ鳴くさ乃鹿のね（イ）
あるとやまつくしひかせうとや

題志らす　藤原家隆
見る夢乃あらうつをさそうしきて

まてハと都敢臣
と別ある入るり
名誉をりとぞ
おのづからなる鳴さの
え明の夜に鹿の好の
物思ひきに秋悲せんう
うく我もら深き
山居ともとこ心よ
里よめる也
見る夢乃る事もすべと
夢に夢の見てしまを
叶くよめつき夢まえ
し事をこまてさ
それもあはれき也
その世山いはいひの

さむるよもしもむかしをあはせて
太宰大弐重家入道（安元二年六月廿五日出家　治承四年十二月廿日逝去）
山寺懐旧といへる心をよめる
藤原有家朝臣（重家子大蔵卿従三位）
その世山ハ里いりしいりのねをきくに
むかし乃ことそくあるゝうかりてさき
春乃比久我（コガ）にまかりける（久我内大臣雅通公承安五年二月薨五十八）に（多知の近し）
て父がさの墓所の乃ゆかりのたね
花ちりけるを見てよみける花にね
しみ侍りける心をさいはひて

一日苔ひと日てふ毎
は之券乃別のさき
るゝみきさるへし
初瀬山ハ難の山ちきぬ
あり
ちりしける苔の下
心ハ明らるへし
入道前中納言雅兼
六条右大臣顕房公子
保延元年十月十二日出家
うれしさをよそにて
苔乃袂ハ入道のこと
思ふまゝうれしさを涼
はもちろんへの衣袂
ゆきうりうてくと

よみ侍りける　権中納言通親（号土御門内大臣 雅通公子）

ちりしける苔乃下にも桜さく
おもひこそやれのこるらん

かつらかりて侍りける前中納言雅頼（源雅兼之子）
まだ小男に侍りける時始て昇殿申
させ侍りけるをゆるされ侍れは悦て
奏せさせ侍りける　入道前中納言雅兼（号薄雲中納言）

うれしさをよそにもつゝむへき
こけ乃たもとはせはくもあるかな

還昇（クハンセウ）と云く侍りける人乃よろこひ

---

いそきそもを本寿
ひく隠子乃昇殿ゆ
許さるゝを扶のふ
還昇（クハンセウ）と云く　環翠部の
職原抄ニ云殿下
より地下ハかりて又
殿上するを還昇の殿
上人と云し　還昇（カヘリノボル）
うれしさをよその袖
ハ雲井云天羽衣と八侍
臣の衣をと云縁りなる
ハ還昇乃沙彼ニ
つゝみて衣の心ニて
還昇の春いをそへて
よみ袖をとよめり

侍りける　藤原季経朝臣

うれしさをよそ乃袂までつゝむらむ
たちかへりぬるわれはきこえて

今上乃（後鳥羽院也）御時右近乃少将定家語
らひ侍りける事侍りけるすまて殿上のそ
れて侍りけることも（殿上乃侍用とけりて）蓄よりける又の年
乃弥生の朔日比（後白河院也）院より御気色ある
へきよし左少弁定長のもとより申侍りける
をうけ侍りける　入道皇太后宮大夫俊成

芦たつ乃雲路まよひし年くれて

君たち乃御所なりし
定家殿上を除れし人
ると君たち乃御所よ
ひしと詠みて御ねかく
て年暮ゝにかゝるに
かすみをさへ勅勘に
てはつへきやとの歌
きの心を中將乃孫子に霞
をさへやとよみ奉り
あしたの霞をわけて
今還昇を仰せ下さる
またハ心晴ぬへしと
此事古今著聞に有るよ
かつ見る此集を可見し
此為の　言乃葉の盛下

かすみをさへやへたてそれハかさ
ばかりを奏し侍りけれハいとかしこくお
いれわかしく（おもしろし）て今ハそや還昇（くゑんせう）仰せ
そさとへきらし御気色ありて心晴るよ
乃ぬし仰せつけよと仰せされけれバよ
よみける　藤原定長（左中弁光房子　参議左大弁）
あしたの霞をわけてかゝるあり
まちわびし雲路（くもぢ）いまやたづるらん
此為乃隆わかれおむきの此躰代りし
ことあるすとあん時乃人や侍る

短哥　万葉集にハ多く有
乃ち丗一字のあるを
短哥といひ旋頭古今
に短哥とて長哥を
のせてあるにまかひ
て此集にも用ゐるにや
ときハ川瀬ゞの岩
かどにわきかへることく心ハ繁
く行末もせかれつゝ
流るゝまゝにいはん枕
詞によみ出せり
もに住虫の我からを
身乃沈淪を我不
器乃拙とていひなしを

# 千載和歌集巻第十八

雑哥下　雑躰　短哥旋頭哥あれハこ（一本ニハ雑躰乃字なし）

短哥

堀河院御時百首哥奉りける時
述懐乃哥とてよみ侍（侍）りける

源俊頼朝臣

ときハ川　せゞ乃岩かど　わきかへり
おもふこゝろハ　おほかれ（けれ）ど　ゆく方もなく
せかれつゝ　底乃みくづと　なるものハ
もに住虫の　われからと　思ひ知りてすハ

ともいふ我からこそと
思ひこかしもやみけ
さはにえてハえこそさこし
ひく人もなき歎すと
誰ひきとする人
なき歌するもそさ
歌してのこゝ
あをけどもむなしき

なけきとも いひてはえこそ なきさなる
うもれ舟乃 埋られて ひく人もなき
なけきさすとも 彼乃葦原 なみけにこそ
むなしき空ハ 年ふりて いかにもなき
かなしきさり ねんのたけハ かくこころを
おさまる袖も ふちそてぬ

菅家 時々（ヨリヨリ）仰（アフク）二彼蒼（サウ）一
この頃ふや彼蒼ハ天さし
荘子 蒼々（サウサウタルハ）天之正色（ヤ）ニ何かくさハ名もなきむなしきからなり虚空（キヨクウ）
いかにもなき躰にさに天乃物いはねとし 論語陽貨篇子曰天
何言哉（ヲカイフヤ）四時行（ヲコナハレ）焉百物生（ス）焉云々この哥乃心ハ破舟乃ひく
人もなくて埋られたるを摩哥乃やうにおもひて我身代上よりひ
けく引人なきに歎餘りて立居り天を仰けハ虚空蒼々として

---

ゆするもなしとてかこつとり蜑しかるゝて袖をぬらしぬへし
はるりふかハ家をも
拾遺 近江なる打出
乃濱乃うちいてつゝ
恨やせまし人乃
心を此頌を見るに
家をこふる人を我う
此歌を引出てみと
を誰かいはせをと
ていうる事かまた出
ゆけけるとせんや

はるりふかハ 何それとも らうん人あり
あふみなる 打出乃浜乃 うちいてゝ
いそうし誰か ゆくらんの いかさまなくし
つかきはえらん ことを新に みくらうせ乃
そけしき比と 声もなきうちの浪かも
なまつき

とかく風雅き比と新るのうへにし再しおゆゑきと也
作り物のといふは島とつけん枕詞し懸のいひし新端なすく
趣されハ其頌乃猶まるへし　此山頌つきせをを流るゝ兄鶴
へくこそ風けちきとは趣乃いまきつらんより志難きこゝをこめて工夫する趣なや

あつさ乃杣とハ
梓杣八雲御抄ニ云杣
木ハ栽木也 所名也
集ニ載ありて梓乃杣
よ立ねとも杉乃本と
こうやわすれん 此哥りよわりて 此哥も杉ありね本立乃あれけると述懐
うや後拾乃父ハ大納言経信也 一品式部卿敦實親王六条左大臣重信のはこ
流垣ハ原よせりつみし 此集読人ニ不知ハふせん みのきこうてよつむ芹のねを
の手ふけと読人乃ちき 童蒙抄芹流し篇此人もわかうくや此ハ摘ハ多
もささん そうの哥乃心ハりや かやうのすハ高ますさあると咲に思出あると也
さすかよ 此姫か
堀河院 應徳三年十
月即位
あふへのへも名つての
月の桂を折とハ及

あつさ乃杣よみやまひきし垣の原ふ
せりけるし 篇をよろうよ きこしりと
わか身乃うへよ まりまそてね

さすかにこゝろ北 まとめかね 雲のうへまそ
かくへとも 高き乃かすも名つき乃
月乃桂（のすゑ） おられねハうけし花の

第すまりし 拾遺集ニ
春経 はるハ花の梅
こそまむりき也
うけうか花の 木也
童蒙抄云集注ニ雅ニ曰
木ハ花まきとこそと開
けさるこう とろ
をうけるとりし 略記
りせきふ心ともまさ
よしの山ふおくられて
はれ乃うきも奥を極りし いまそゝみハ人ありの心用ねつすつ乃心をとる
くる何それハ山居御所乃君も為り 墨乃衣見えし後世菩提を求
とさへとも極てきかすつわかく阿くうれゆつきて方も宮くめぐりうあと
このもゝのとしけ高徳也 古今 世をいとひ木のもとごとに立よりて
うつふし染の麻の衣也うつりかめハ捨人（ヨステビト）業門の衣也 花乃被ハ非位

さきあかう ひらけぬ車乃 りこせさうり
よしの乃山をはいれて このもかのもよ
よるよし里うつりすめの あさ〳〵も
花乃被りねきこへて 後の世を可
とこへとも 哀（おもむき）あふ人く わかりぬく
ゆくへまきかしもやすとられね

乃赤衣をりつや遍昭乃仁明天帝崩して遁世のち人〻服ぬきて叙爵なとせし時皆人ハ花の衣にかねて苔の袂よかわきたにせよとよめり世乃うきめ見えぬ山路へいらんにハ思ふ人こそほたしなりけれ皆古今うて乃千年ふあるかなり五千世界あるへし古今恋部雑躰のかゝる僧しき身あらはつとめる年々をすてゝ世まハ歌つ乃意得り歌よみの山林に入る也いまは流れ之光のま古今秋乃田のかれうつてもとのゆきつまれ光り乃中にも我や上るて詞年をかりゆすまふいかるさとこそ出よ五千年ありくして百年ゝまるへきとも

かゝるうき身乃流れもやらて（流れあへず）へよる年を
のちの世ハいつ乃ときにかわりなん
いまの末そつゐに流れひかり乃ゆきかし
さとめなし今つハひかりおりてゆく
すまふかすくとも見ゆ若る
こゝろく いなゆく瑜ことなし

---

多伊乃多の心にくく僧都りことをすむのかくあやくるさかりぬへしとて僧正遍昭さゝめもいたしかいりてき世すれハ何執迷悟を定めてじ漸ニ百の歌宋乃露の身なれハとよの雫と消えてへきを期とて河と志てまれハ晩年ふいりてハ世ふ入んすとのとのまにい閉む（シウ）（へきよし）まく発心すへきとかや末乃露もとの雫や世の中のおくれさきたつためしなるらん　遍昭集かくの手はのに争ひそ非器の身なれハ遁世すつきうとたへハわき

さゝめもいたし名結乃おかれのすゑ乃
露すれハ何しをくらしてすゑく
とよの雫とあそれてんかとをいつと
志かくのハ業ふとをかも志つむへき
かくの手はのまゝ行るひて
秋かる雲ふ
植乃にの志わまてよふうつせひ

しまて粧てし此
こひ名覚も待まて
しき露の朝なれバ晩
年ふるもやまずて
こく〻殊んせんうき云ひ
かく常に字何ふるかひ
まひくれ世にそびて。
果てし本心も失果く
何ふれもおりて世ふかる
れふ文何ふるうたうきめ
をくかきれもんこと
うせうひハ空目男なき
見とうて心の枕は現
心ハ幸心こみけるを
とんこうけて一熊

うつ心もうせえて何するにもあかね
世乃中ふ名けりを見るかのくうの
ためし中にかきねの法くうきりてゐる
こめしかいあるおの松の法也しこ
いさ法しこえを吟きつめて家志れん
ゆくすゑ乃人のこめまハそのはり
無きれねつきき男なれども　いかなきすりも
雪とかり乃あやよ嗜なつね　くせそれも
これもさうかハ見まず　深　持まのにた
うつ河をまきめ

野乃露此露本錦とハ童蒙抄云芭蕉り似たる草乃くき此皮の高
くそておりくうきかれとし人丸しうく乃ちる中よりこえあるもよみうるさ
うまふさしきもこめかふハちるかの松　世よ絶おの事なれさめゆみ乃まん
こひけくもし鳴尾の松を持ほし友なきさ松なれハつまさくさいらん枕紹
也在佐和の字よ　あるおるなるさる松乃つましくさ独も書よそわ
久く所と云ふ可
ほとくとゆるこをきつめて　出集て此ちなれまふるや文信松乃
集をうら安名抄口伝書へちに迷法乃おなりくへし表さるんいか
乃世し乃人ありにひ思なれねつきさ我かさを我しも何まてことより
かく不貴此男なくそのおきすすふにくをも何やふくよ吟なる想
くせそれハさうふそも理をれ果くく世まのぞるへつうすともも
雪なれおや袖中抄云宗よか乃おやのなきも何そもと人をかひえぐ年
乃つねまハ形服云雪鶴乃文乃綾也　ばある大和経よ雪とかり乃おやいとや
よむつきと何かし　みてるよめるなし　はとそくるハおやよ嗜なつねとしらん
枕詞も何やふハ浅摂よ何やふ字まくとかる　鶏きくおやかくこし男なす

葉ハ将ぎやかに埋を
れんといふんさせ
それは流るくも
叶ふ事なりもり
流るゝもいてあひ
ろわくしみくを我心
まほぼるりかす不香
乃身をうすむんとせ
拾遺 清の水れ生田
乃池のいくひは清
らき思を我よ見せまん此羽を用ゐまてあまれさくあらく入侍らん
海人乃くるや こくろあつの乾飛
世乃中宇き身よ
此歌金葉集ふへ
夕の柴よ秀作

それゆ流るくも清乃水れ 生田乃
森乃つくひおふれてこそ とむ
かへしやりそれね 身を悩ん

又哥　おのまへこの心を卅一字によむとぞり

世乃中宇き身にうつるかけゆかや
おもひすつまでもられさりける

百首哥めしける時よみせふれる

崇徳院御製

---

しきしまや倭歌の
和哥乃修業へとよめ
るに
て清神代よ 天含原に
此哥流めつちひらけそ
しまわる時に出来ぬ
乃わに作 神陽神の作
まやや乃清浦日本紀に
いつよのこや 素盞雄
尊乃神詠乃清らにし
てし業の 百家衆流 世
世のこの楽と風乃流
けつくは風体の他
わかれの流れを清川院
乃百首の流れをこそ

しきしまや倭歌の哥れ 清きうかめと
きけしけるは 久乃まて清神代に
そしまわくみそらしおもわ ひらしは
いつも乃流れ ハ雲あがり ならはめかかり
しるすあるされがはハ言しき業乃
こゝのそ茂く ちかくに風ふけて
きこゆれとちゆきてゆは かわはの
あかれをみそくさき 清の上かる人よ
行つく原く 清きあきらすは 流る香
おとを末おくく さらや と云ひあへりし

てに例なく人こう
百首の歌をめす也
法の空乃難波の
ほどなくの枕詞とぞ
乃独まず八代集八
のこさしと思ひけれど
ほどなく出すとすの
せおりける歌
よく人に知られてもよ出やせんと思へども　ほどなく法のにも
けらを出しつねとうせねひしとあるも背清謙退の意なるも
羽来師森　山端之知らまとうけく　かわりやせんとひかけさせまうり
おなじ百首　一本おなじ清
こきまぜ百首奉りつ
年さえ了ね谷の埋れ木
いつを花咲く時とも
身を知るかたなり也

法の空乃　難波の浦乃　ほどなく
母乃さまずに　出ひるひし
あこりせく　世の人さへ　たづ乃
かわりやせんと　思へども　ゆりをはるを
かぎ清しぬる

おなじ百首奉りける時のながうた

待賢門院堀川

此時堀川乃局出家せ
しかや未の様ほうまさ衣
こきまぜてねみ一世遊と
は類行り
はり乃あやめもわすれを
若みどりの室いきみまへ
はり乃春毎にふる月
まきれやさし若の春
四時を上げるさもや
至合にぞ
家とぞ心もなと
若ふ心をうけより
崇徳院を偲きまする心
どうけ縁より世の遊

こきまぜしね谷乃むもれ木　くちそて
むかしの影乃こひしさに　はり乃あやめも
わかなもの　若みどり月の　新つもの
時雨にねる　袖乃うらなり　立秋まさる
はなさうずも　霜をうけく　とふ人も
波まてたとに　ほと丹乃　こきぞまかれ
世に逢しさを　若き心を　うけしより
立けき遊をも　わすれ草　尽れのそて
すみの江乃　松乃ちぎり　きるしと
楷えるまに　さうゆくき　年さ家の絶を

もみぢて君か。

よむともあくまじ濱乃あくまじく
ふる乃社のその名ありきかつらて
わたれかし紅葉の下紫のゆかりやと
とるみ森よみねまでと（ミテ）いまハおもひきや
とりひ流く露れるよせるろ（く）
かきはつやするみくさにあさき心乃
かはれまく（きはり）おかれての名を句とりれ此
うきつくれやあらんとすらん

常盤の色を知れるハ
鮮やかなるに
常時さまれ（ミテ）さだく
しろくやさそしにハ
しれ佑し紅哥と
ゆふの五百首にの
おるやと歌人佑れ
と老の哥あるへ
果さく古集ても
しるき心得るお
られては世の名
も句まうきをの
さめけれ成佑んと早ゆの恋ろ七物言葉ハ佑表すせる学
それハ三れおまく佑の紅とつけ松乃名とせ笑ゆへてきやくハ君を

---

強ひなる心よりつけられたるなし　崇徳院乃生母待賢門院より
みやはしら乃人それハ秋となる冬し一入ありけるにし　名草の濱ハ紀伊
也あくさきその枕詞なる社ハ大和也影とそなるところ布留とも
古きまゝ尓用ひたるの名をさしけるの紅葉の下紫とハわすらの紫
をあらくとよせり老曽森ハ近江也紅葉をよみたりてけるく我
老なるをとるて今ハおもふあつひてとハその身の衣乃さね
も衣何すをとりひかけく紅葉の紫ゆく嵐のちの露れのよ句をも
へてろとよめりおかれての名を句とりとハあれてハゆかしき衣あすし
名を句ととるて琴ハ流まゆ浮ふ物されいうまくあしとの露ん枕
詞なるへしすてく短き歌ハあるまくゆ名を尓流けるそてゆく
物されにこま詞の孫を
よくく心をとるそ
見佑るへき物にや
さめけりの下総
しまきりうさとよむ

## 疑頭哥

（躬恒集にハ句のとをめてとそうとあり　拾遺集のおして歌る常にたる哥と達）

しらりけるさ乃名ありかつれなる
と経そてゝのゆかりをしるころ

河はら乃やへ乃
八重乃霞をおしわけ
しまても見えねは
ねハ花霞をつゝきさ
あやなく千も晴を
とゝむへし

かきたえしまゝの
真間継橋ハ下総なり
橋ハ踏みたえたると
いふをかく東路
ふりて絶たる橋を
此哥ハ今は絶たる故
中に隔し霞も晴
て對面の如くいひし
何つまる乃野洲の浦の

野洲の浦 八雲近江にと
もく都をへて来て
此浦風の松さひさ
にみほく嫁ゆうの
千かりに思ふへし
折句 八雲云毎句上に五文字
をゝく文字をつゝきき
まるなり

こいしき 殿上乃南面
にあり 禁秘抄
殿上（ニ云）小板敷西有棹（リ）
間小庭時簡膳棚灯楼
こまなへていさみに
駒なへて心のゆく
なり此上に小板敷と

---

千とせとみえしからの都にはなち
きける
源仲正

河はら乃やへの霞みをわけきても
見えりあかねハ狩場くる心ちこそすれ
源俊頼朝臣

同し

かきたえしまゝのつき橋ふみみれは
へたてる霞も晴てむかへるかな
百首哥奉りける時旅乃こゝろを
よめる
左京大夫顕輔

何つまる乃野洲の浦のさまのまなきなり
わかひとゆかりし蜂の数の千かけも新まえゆ

折句哥

二条院乃御時こいしきといふ五文字を
句乃かみにおきて旅乃心を
よめる
源雅重朝臣（従三位行宰相 中務権大輔）

こまなめていさみにゆかんたつた川
しら波よするきしのあたりを

おなし折句乃五文字を句乃上に
おきて旅乃心をよめる

ふ不字清り
あきとあくとのう
心ハ様のうち五七五
七七乃句とのうゆり
うたも何ゆこの字あまる
物名 八雲云是ハ隠
題也物の名を隠して
よむなり
君乃かくふかうあん人
かくすみれそる人涙
乃氷魔へ刈をする宗
うてなへ
すみれを
はとしてくさみつさき
かくなつかし宮を

仁上法師

あきとあくそのう逃うさあき風乃
身乃しむ秋比様乃𥿻覚えて

物名
すみれをよめる

和泉式部

君乃かくふかうあん人やさまわらん
涙の手ともつけさみそれする

中納言定頼

すみれ
はとしてくさみつさき人もおもわしかて

龍わくらんうみへさ
人もかくしのひと
かきさ乃くう 蠣殻（カキカラ）
さうきさ契ふハあちもせず
赤（アカ）玉垣をよめるうか
かわ清み 和名𪔂鼓鼓（アリツヽミ）
周礼注云𪔂鼓如鼓而小 持其柄揺之則旁耳 還自撃之
池もかりほうみ
池古堤崩也 拾遺
鳥もおでゝ世へねん
内すうの池ハかつ
するもうつし 勝間田
我駒をまつりとする

ふれぐしけさ乃雲をわくらん
かきさ乃かう　大弐三位
さうきさ契ふハあちこちせずと神うきさ乃
かうられおかりえてわするかな
山かは清み　二条太皇太后宮肥後
池もふりつゝみくづれて水もなし
むへかつまたに鳥も居さらん
かるかや　源俊頼朝臣
我駒をしばしとかるのやまたの
こそ乃里ありあきところへ上

志りしかせよしれるまゝと
や万葉十一「山科乃石田（イハタ）
乃山なるハ帰れとかち
よわ吾来（クル）れそひね
おきさ乃やまそ
細射（サゝキノヤタテ）乃お立りや　順和名云唐國篁令云細射（ロホケニクサゝキユミヤ）弓箭　今按此間云和名（万こ岐呂矣）
みそやまちまの屋　御倉山　山藤と弓をつひとも念とふりつそ
弓をはむと読ふまや
かりの乃かりさき
よそにに心をかけて
かその乃うきとハ虫病
「望國ありまし清輔
「宮辨をすむりひまん
世の中ふかりかりけるを
しつかに名寄とも

---

おきさ乃やまそ
みそやまちまの屋にて　猛民を
弓をはむともくちしらおもふ
かりかみ乃かりさき
よそにも心をかけてまのめとも
我りりかみ乃かりてさ志るしら
ちりちき　刑部心清輔母
秋乃野より誰をさそらん紛くわ

---

よめり我らかみ乃
かくさ給ふ世とも
ま杉めるも神乃心は
うきよの空ろとも
秋乃野より誰を
独ハ秋をま多る亭
かれありや心吹う
秋ハきかまかすさ
雪ふくハ雷ありそ
晴よしと之秋ハ遣
「いなり山志るし乃杉
延喜式　稲荷神社三
座　下社大山祇　中社倉稲（ウカノ）
魂（ミタマ）　上社土祖神（ノミヲヤノカミ）とぞ
其三つの社といへり

---

ひとりゑばきをみるらんひともなし
百首歌奉りける時乃隠題（カクシダイ）の歌
きりくす　待賢門院堀河
秋くれはきりまかきすきぬれハ雪ふりて
ちるもまもろきみやまへ乃さと
みつのゑ　僧都有慶
「いなりやましるし乃杉の年ふりて
みつ乃やしろハ神さひにける
「かさき乃ゑや　慈遍法師
名乃しおりて常ハゆるさぬ森にも

扨水呑とかけるか
かさき乃つるや　解脱

いくつりさきさ乃いゑやとくぬる

上人乃黄作る所也　元亨釋書五ニ有　笠置嵩山城也
名しかりつ注ねハ　万木森（ゆるぎ）近江高嶋郡也　六帖　はれやゆきさ乃森ふ落る
すむとひかへれど何ふ物を　常ハゆるぎ動くるの名衆可森
りいくく落れやかとくいねるそとく

誹諧哥　右今接續
かくり夷の宗祇法三
誹諧ハ飛乃進道とを
数識を本とするまう
わやしくも花のゆるか
かくしこかめん人や何
れとく何や心きうり
花の何なるこす大事や（リカニ　サ）
しらむ　李下不正冠ヲ

誹諧哥

花乃をとにゆかすて読侍る
道命法師
何や志くも花乃ありかふ心せるるる
おもとのめん人や何るらく
御たへと読る
源俊頼朝臣

---

瓜田不ニ納履ヲ乃心にや
うろたへよとそくとし
そいふ教訓の趣也けり
沽ハ西寿みけ浴の浪
もむ笑をこくむく
えしらぬやひの波ハ花
こくとまとの思ふや
名ふくるまでとよ
夏きをとるるのうき
まうつて秋りねきせ
そ續命縷とて五
月五日菖蒲を結る
こここしとて箱根の
箱根ハ伊豆之麁とよ
せて祈るの戻るさる

うろたへよりでこそしかけ浪の
波もしさらつも笑をこし乃

五月五日菖蒲をよめる
道因法師
名ふかゝるまとふねまきせ何やめ草
うきさいわる身を何かとまるとや

とりをよめる
橘俊綱朝臣
こととしまて箱根乃山ふあけまそつ
ゆくかりこそ何めとせしかに（イ又）
冬る月晦日かさそさそのゝく

これをくらかけつと
いへハ箱乃蓋にゆかりある
蓋あとろへても
夜乃うらハそよかれ
とさゝかれハうらみ信
見ておもへハ惜ゆあ
それなし源氏物語にも
行道なかれはね行
えちなる道をそあるな
こゝろすへきことなり
秋されハ姫のゆきさし
時ならぬ男と時
ぬといふ姫ハ姫の
ゆきさをゆきといふ時
なとこれ乃かれ男れ時

とゞめてよめる　江侍従

夜乃うらハあらむかれてもはかなくて
おもはすなりけるむし乃こゑかな

題しらず　輔仁親王

秋されハ姫のゆきもみえくるを
時ならぬ男とおもひいつらん

萩乃露の玉とみゆるもおもひ
かれても露（いとイ）あまのかれによめる

藤原為教朝臣

秋露を見つけて見れハ袖もなし

らぬといひくさし秋
乃ゆきハ萩散りて
時ならぬ男れハ感情
ところを喩へよみ玉ふ
不そいかなりや
あさ露を見つけて
露ハいつせつと萩
をゆするといふとし
流るゝ思ひその
家持集流るゝめく
浅茅か原の壺堂る
ことを手て萩花ろ
ぬくと云調おれ也
かちふきとしていふ詞
古今序にさ乃野にくるはかきの露をわけてかなるわかる

萩乃うら（らイ）わけ行袖やことゝしも

崇徳院に（の御時イ）百首哥たてまつりける時秋乃
哥とてよめる　花園左大臣家小大進

流るゝ思ひそ乃芝生乃白露を
ぬきちらしける玉かとそ見る

野花をみて道にとゞまると
いへる心を読る　僧都範玄

おちかたをゆかはゆかれて手まくらに
こよひも花乃陰やとらん

其花を見にまかりし人乃かへるを待て遍照乃よミたまひ
しる小笠てとよ　九月十三夜によめる
る誹諧なりとぞ　賀茂なきひら
萬此秋こよひ
三夜を見ずとこそ
てしとよめりあまり
さくみえて不誹
諧なるべし
萬此秋こよひ限やなき月影を
十夜の月はありともくもらぬと成ぬ
偏我周他意といへる心をよめる
登昭法師
板びさし降すやまで
板びさしさして萱
屋の板廂は音此店
萱ふきは音をせねど
我をへとまでおとせで
他へは音をするのみ
なりとてよめるか
板びさし降るや萱屋乃時雨こそ
音しもせねかくこそわりなけれ
堀川院乃御時百首のうち恋哥

---

くこまやかなるあり
らく誹諧なりとぞ　こゝろをよめる　藤原基俊
此竹乃あるなるはまし
めぐし竹乃何るおきふし乃世の中や
ゐし夜ならてなる君
何とてや此のうきふしあるらん
とふするの節なりなる
んなる世おもしとの意
様恋（百首の中）　源俊頼朝臣
笛竹乃穴ごとくに此
乃限をも誹諧なりや
恋するも恋乃やつこの様みくを
恋といへる恋乃やつこの
身乃くせなれや夕ごとろきさえ
恋乃やつこ万葉十二
恋乃やつこも我は忘れし月十六日も恋乃やつこと此は千々ても猶
八雲御抄に恋乃やつこは人を恋ふ恋にくよはするを夕べ
きは夕ぐれ猶うちさわぎ恋しき哥の心は様ゆゑ恋しき心
乃ゆるひまなく夕暮まで一入恋しきを様々てかく何るは身のくせ
なれやとよめるなるべし　奴乃様ゆゑよそにるやうに恋のまされぬを

並乃如の云ひくると
よしさふや
かゆり乃あけほの
かゆり乃あさき歌も
こゆるへてひいけさ
れ侍るもかの重ね
歌乃詞さへと彼集
自き人乃身ふも思ひ
て重ね歌をよこの
集るまて云ひ出れる
しきホをこれつら
て頁さとすふよ
ふよむ不謂諧るや
六波羅蜜寺　十一面観音
空也上人建立東山に在

百首歌よみ侍りし時並乃歌とて
よめる　　待賢門院堀河
かゆり乃あけほれ流るる花さへと
おへりし人乃こゝろをつゐまて
六波羅蜜（ラミツ）寺（ジ）乃講（カウ）の導（ダウ）師にて
高座のうるよりふ軸物の女房
かもと流ふ侍られるによめる
良喜法師
人乃足を洗ふまてもかぬ我ぞく
小みをとせすと思ひまるへし

天暦五年京に疫病
ときふれ人あまたう
せけしに空也聖行
てみつら十一面乃大悲（だいひ）
乃像一丈なる刻（きざ）く
初めるも疫病やき
初此寺と建（元亨釈書）
人乃足をつかえて
經れるへてつかまつるを
とびみしまゐらして文
を編まりけり
おそろしや未菩の
序歌に心ある文
をとせしを知れ
いやしき心なるや

山寺まこもりて侍りる時心ある人
と女乃志（こころざし）ふ流しけり侍りれいよ
みてつかはしける
空仁法師
おそろしやきそ乃かけ路の丸木橋
山みのまるしひしかかちぬへきかな
鞍馬社にこもりて侍りるに
彼平はねまゐりてきく妥読
経めきなかして何そひたる
かさりしなる流れかねまこもり

隣は法師にも心を
こめてしのぶるべき
哥なるを女人は嫌き
くれ候といひかう
るへしつゝしむへし
笛竹乃こゝろくと
胡竹（コチク）乃笛と崇家
ともて宿お聲
かなてつしとこちへ
音をもわかちしん
隣へきこゆる候り
成物をとし隣に
笛のます文選十六
向秀が思旧（シキウ）賦序ニ云
鄰人有吹笛者

しる人ぞ知うちあさへも
おのわすしらるゝきる人ぞそ
て捨ぞしくまうてこさかくれは（隣なる君の人に笛そし）
流かくる　心覚法師
笛竹乃こちくとはおもはれん
とかりはやともせしやすきなる
何つまれてまかわかれる小八橋
まそよめる　道因法師
八そ乃わかみにぞ（そう）とふまるかな
こゝりすむへきこのそとこへこ

發聲寥亮（ハツセイリヤウリヤウ）ト云
きこゆるへし（カスカナリ）
八そ乃わかみに
こゝに便りさ有へ
さもあらねはそ
その心をこ河とろ
つくし
法しとてさそは
君らつくもゝ只
きかるにてはよも
我は止じうてし
より白髪とかを
てもとし烏頭白
ハ史記燕丹か事
阿弥陀乃小咒

女をめさひ待るといふもとも
おるまじき事也おもひそね
こひ待くれはよめる
安性法師　俗名時光
法しとてさそれはよも我やま烏
めしらはこゝろてある世なりとも
阿弥陀乃小咒の文字を哥の題
にてしく十首よみ待るとり
おくにゝき待る
源俊頼朝臣

阿弥陀大呪小呪
とく侍り
かねにとなふる文字え
黄泉（ヨモツ ヨミヂ）冥途也
なるも又午乃貝
十二時の貝を吹けり
午剋乃貝ハ童蒙
抄云摩耶經ニ云譬ハ
栴（セン）陀（ダ）羅（ラ）飼（カヒテ）羊（ヒツジヲ）至（ホフル）屠
所ニ歩むごとに死地ニ
近付（ヅク）がごとしいや午と云
ハ羊也。往生要集ニ至ル
屠所ニ羊ノ歩ニ近ク死地ニ
ごくらくハはるけき
拾遺ニ仙慶法師之

---

かねをとなふる文字（モジ）ハ呪乃ゆなれハ
うきもよみぢをとをさけざらめや

山寺乃まへてなりける時貝吹
なるをきゝてよめる

赤染衛門

なかもなる午乃貝こそ吹（キ）つされ
ひつし乃かゆみちりつきぬらん

題しらず　空也上人

ごくらくハはるけき程と聞しかと
つとめていたるところなりけり